

## 『功名咄』一（上巻ノ上）

本稿は東京大学史料編纂所蔵・押小路文庫が所蔵する、写本『功名咄』（三巻六冊）のうちの巻上ノ上を底本として翻刻するものである。詳細な書誌は完結時に記すとして、該書は片仮名漢字混じり本、三巻（上・中・下）六冊、縦二十五・六糎、横十八・四糎。後補書題簽、左肩単辺。序文に「元禄八乙亥歲夷則（七月）下旬ノ晡盡菴記探西翁之」の署名があるが、探西翁が誰であるかはまだ突きとめていない。今稿に収める上巻ノ上は墨付五十八丁（うち序文・目録各一丁半、但し目録は上巻ノ下まで含む。上巻三三話・下巻一六話、今回は上ノ上を掲載した）。目録はすべて「○○咄」で統一されている。本書は上記押小路文庫蔵以外に、金沢大学北条文庫と大洲市立図書館矢野玄道文庫が蔵する。二本とも片仮名漢字混じり本、大洲本は巻下ノ下を欠き、上巻表紙（書題簽）に「堀部彌兵衛著」とある。三本ともほぼ同内容であるが、細部に若干の異同があり、それらを比較するに、三本とも原本とは言えず、三本に遡る祖本があると想定される。他に京都大学附属図書館蔵の『武道撫萃録』二八三・二八四に、『功名咄』下ノ上・下二冊が収録され（平仮名漢字混じり）、また、明治四十一年十月刊『功名咄前編』（川口一雄校正・報行社刊）が『功名咄』上巻を絵入りで翻刻し（ただし底本の四八話に比し八話欠）、国立国会図書館と学習院大学附属図書館（二五〇頁落丁）が所蔵している。

『功名咄』一（上巻ノ上）

## 江 本 裕 編

本上巻ノ上、は平成十七年度文学部日本文学科の三・四年次生対象の「近世文学演習」で扱い、更に平成二十年度大学院文学研究科開講の「近世文学特殊講義Ⅰ・Ⅱ」で扱っている。該年度大学院での受講者は市毛舞子（研究生）、飯野朋美（後期博士課程三年次生）、福嶋由実子（後期博士課程一年次生）、長澤麻衣子（修士課程二年次生）、和田麻衣子（同上）、井高美妃（修士課程一年次生）である。如上での成果を踏まえているが、今稿の初稿は井高が作成し、それを江本が凡例を作成しつつ校閲した。従って最終的な文責は江本にある。当初、江本は、本書が別題の先行書の転写、ないしは抄出ではないかと疑ったが、管見の範囲、独自の武辺咄であるとの結論に達している。順次翻刻を行なって、読者の判断を待つものである。

### 凡 例

- 一 底本は東京大学史料編纂所・押小路文庫所蔵の『功名咄』（三巻六冊）の「上ノ上」である。
- 一 翻刻にあたっては原本を忠実に翻字するように努めたが、通読の便を考慮して、概ね次の方針に従った。
  - 1 本文各話に、一・二箇所段落を設けた（底本・他本等とも段落

はない)。

- 2 底本には句読点はないが、私に句読点を施した。
- 3 本文の中で会話体となるべき所、また心中思惟・格言と見なされる場面には「」を付けた。
- 4 本文には割書があるが、当該箇所には「」を付けて区別した。
- 5 漢字について
  - イ 常用漢字にあるものは原則として現在通行の字体に改めた。
  - ロ 異字体・略字体は原則通常の字体に改め、宛字は正常な文字が想定できるものはそのまま用い、難読のものについては平仮名でルビをつけた。なお原文は、「衛」(数箇所)で「エ」と表記)と「類」はすべて「イ」「イ」の略体で表記しているが、すべて「衛」「類」で表記した。
- 6 片仮名について
  - イ 底本は稀に濁点を付し殆どの場合濁点を付していないが、底本のままとした。
  - ロ 底本に使われている合字「キ・ヒ・フ・フ・メ」に関しては、それぞれ「トキ・トモ・コト・シテ」と開いた。
- 7 底本の反復記号は「、・く・く」であるが、これを「、・々・く」とした。
- 8 振り仮名(ルビ)は、底本は片仮名で付す。翻字にあたっては、底本に付す漢字については片仮名で付し、難読と思われる漢字については、平仮名・現代仮名遣いで付した。
- 9 底本は「レ点・一・二点」を付す場合もあるが、当時の慣用として、付していない場合が多い。原則底本通りとしたが、特例的に私に訓点を施し、その場合は( )を付した。
- 10 底本で疑問に思われる表記もそのままに記し、本文の右傍に①②で示し、各話ごとその異同を末尾に、大洲市立図書館矢野玄道文庫本(略号(大))、金沢大学北条文庫(略号(金))で示した。

付記 翻刻を許可された東京大学史料編纂所に、深甚の謝意を表する。

(序)

此書之大旨如何有問人者可謂／智仁勇三物坎生武門者不有  
不／飲盜泉水志千差万別謂當時理／共非実義去者我及四十  
歲迄父／在存生繼其志然我有子不幸短／命有死者歎無其志  
故先哲拳／一事一言号功名咄後附偏僻／評論事為導子孫也  
抑此書拾／集之内未至其功半速老来也／故止筆畢

于時元禄八乙亥歲夷則下旬

哺盡菴記探西翁之

此ノ書ノ大旨如何ト問フ人有ラバ、智・仁・勇ノ三ト謂フベキ物カ。武  
門ニ生マルル者ハ盜泉ノ水ヲ飲マザルコト有ラズ。志ハ千差万別ナレド  
モ、謂ヘラク、時ノ理ニ当ツレバ、共ニ実ノ義ニ非ズ。去レバ我四十歲  
ニ及ビ、父在存ニ迄ビテ、生キナガラニ其ノ志ヲ繼グ。然ルニ我ニ子有  
ルモ、不幸ニシテ短命、死スル者有リテ、其ノ志無キコトヲ歎ク。故ニ  
先哲ノ一事一言ヲ拳ゲ功名咄ト号シ、後ニ偏僻ナル評論事ヲ附シ、子孫  
ヲ導カント為スナリ。抑此ノ書拾集ノ内未ダ其ノ功ノ半バニ至ラザルニ  
速老ノ来ルナリ。故ニ筆ヲ止メ畢。

時二元禄八乙亥歲夷則(七月)下旬哺盡菴探西翁之ヲ記ス

(訓読に関しては本学増野弘幸教授の教示を得た)

一 源頼光へ渡部綱ハ公時ヨリ後ニ家頼ト成。其初二公時ニ云ヤウ、  
「頼光名將ノ誉アリ。貴殿モ名人ナリ。故ニ望テ家頼トナル。  
向後可レ預ニ御引廻ニ由ヲ申ス。扱トソ名ヲ可レ發心得モ可有之。

御伝授被<sub>レ</sub>有侍<sub>レ</sub>」ト云。其トキ公時云ヤウ、「何ニテモ替タル心得モナシ。乍去ヨク物ニ恐ヨ」ト云。吾モ此事ヲ觀念シ、嗜守テ名ヲ発タル由ヲ語ル。綱モ物毎ニ恐ル事ヲ勤守テ名ヲ発シタル由、或仏書ニ見タリ。

愚案スルニ、中庸ニ云、「君子ハ戒ニ慎乎其所<sub>(レ)</sub>不<sub>(レ)</sub>睹、恐ニ懼乎其所<sub>(レ)</sub>不<sub>(レ)</sub>聞。兵法云、「勝事ハ不<sub>(レ)</sub>有勝<sub>(レ)</sub>、有<sub>(レ)</sub>存<sub>(レ)</sub>負<sub>(レ)</sub>。亦勝兵者先勝、而<sub>(レ)</sub>後戰<sub>(レ)</sub>。負兵者先戰、而<sub>(レ)</sub>後求<sub>(レ)</sub>勝」。此等之謂<sub>(レ)</sub>歟。

一 水野日向守殿家頼廣田儀太夫、摂州大坂冬陣ニ走廻リ、能ニ付テ、外様ヨリ近習ニ被<sub>レ</sub>成。夏陣之時於天王寺表日向守殿馬ノ前ニテ二十三ヶ所手負、内ニヶ所ハ鉄炮ニテ討死ス。日向守殿、大坂落城シテ陣屋ニ皈リ、儀太夫力働ヲ感信シテ、「其死骸ヲ取皈タルヤ否」ト問ニ、取テ皈タル由ヲ申ス。其時、日向守殿宣ヤウ「其死骸ヲ爰ニ取寄ヨ。氣付ヲ入、水ヲ吞セテ、黄泉ノ手向ニゼン」トテ、則死骸ヲ取寄セ、手ツカラ氣付・水ヲ口ニ入ル。良有テ息ヲ吹出ス。其以後、外科医者ヲ付テ療治有テ、終ニ本復ス。年経テ、名ヲ函書ト改テ家老ト成ト云々。

誠ニ、勇士・忠臣ト可謂者也。大形ノ者ナラハ、五ヶ所三ヶ所手負タラハ、可<sub>(レ)</sub>引退<sub>(レ)</sub>。殊ニ負軍ニモ非ス。引退トモ何事カアラン。金鉄ノ勇士トハ是等ノ事ナラン。イカメシキ働也。此徳有依テ、日向守殿、氣付・水ヲテツカラ死骸ノ口ニ入給フモノナリ。亦日向守殿モ、是一ヲ以テモ、名將ノ氣有人ト可謂<sub>(レ)</sub>歟。下ノ忠貞ヲ感信スルノ心ハ、何ノ名將ニモ不可劣。故、忠貞、憐愍ノ誠ヲ天神・地祇感納御坐有テ、二度甦タル者ナラン。豈、武家ニ生レン者、此忠貞、憐愍之誠ヲ不可感乎。

一 水野下総守殿〔是日向守殿先祖ナルヨシ、惣兵衛殿父歟〕遠州浜松ノ城拜領有テ造営有。造営成就シテ 権現様一扁御覽被成、天主へ御上リ被成。下総守殿モ御案内ニ被参。其時 権現様御

『功名咄』一（上巻ノ上）

意ニ、「今時一番鎗ハ仕ル者有レトモ、是ヨリ飛者アラジ」ト御意也。于時、下総守殿兒小性中川何某トテ、十四、五歳ナル童、下総守殿ノ刀ヲ持テ其坐ニ居タルカ、刀ヲ傍ニ置、天主ノ窓ニ上リテ飛ヌ。 権現様ヲ初、「扱々、是ハ是ハ」ト驚給フ。

権現様モ「亡命無疑。不便ナル事哉」ト再三御意ナリ。扱、天主ヨリ御下リ被成道ニ、彼小性出テ拜謁ス。 権現様、「今飛タル小性ニテハ無ヤ否」ト御意ナリ。「彼者ニ候」ト申上ル。「扱々希有ノ命助リタリ。何トシテ飛タルソ」ト問セラル。彼小性申上ケルハ、「御意ニ、『今時一番鎗ヲハ仕ル者アレトモ、此天主ヨリ飛者ハ有マシ』ト有。私存ル様、只今穩ニシテ何事モナシ。左有ハ、一番鎗ハ遠シ。是ハ近シ。私ノ志ヲ可掛御目ト存テ飛テ候」ト申上ル。「扱モ徒ナル者哉。名ヲ付取セン」トテ、中川飛八ト改名有。則御詞ニ、下総守無沙汰ニセハ、必可参由ヲ被成御意。以後成長シテ、下総守殿ヘスネアイ彼是シテ、 権現様御旗本ヘ参ル。下総守殿立腹有テ、申請可為成敗ノ由、度々雖被申上不被下。其後於此者身代ニ替テモ不<sub>(レ)</sub>申請<sub>(レ)</sub>①難<sub>(レ)</sub>叶由<sub>(レ)</sub>、再三達テ被言上。其時、左有ハ咎ヲ赦シテ於可召仕ハ、可皈由御意也。故ニ、隨其旨皈参ス。一生知行二百石ニテ終ルト云々。

此旨ヲ思フニ、生付健ニテ、主ヲモ人ヲモ何トモ不<sub>(レ)</sub>思、廉キ事計ニテ氣隨ニテ和キノ心露モナク、強キ斗ニテ可有。其故ニ主見出ズ。其時ハ我ヨリ劣レル者ノ幅スルヲ見、立腹シテ主ニモ不足ヲ思フモノ也。惜ヒ哉、彼者ニ和キノ心出来テ忠孝・愛憐ノ誠ヲ知ラハ、我ニ勝レル畏敬シ、我ニ劣レル者ヲ愛セハ、武士以上ニ誰アランヤ。飛ハモ廉ク徒ナル斗ニテハ一番鎗ノ位ヲ不拔。故ニ、一生小身ニテ終ルモノカ。

一番鎗ノ武士ハ、知行三百石ヲ関ト可思者也。物ノ頭モ成ン者ハ其程ヲ難<sub>(レ)</sub>定。物ノ頭ニ成ヘキ者ハ、少成トモ、知仁勇ノ志不<sub>(レ)</sub>兼備、可成事ニ非ス。人ノ程ヲコソ不知トモ、身ノ程ヲ不<sub>(レ)</sub>知。可<sub>(レ)</sub>口惜次第也。論語曰、「不<sub>(レ)</sub>患<sub>(レ)</sub>人之不<sub>(レ)</sub>己知<sub>(レ)</sub>。患不<sub>(レ)</sub>知<sub>(レ)</sub>人

也」。又、縦ヒ我ニ徳有ト云トモ、不被見出事モ可有。其トテモ可恨道理ナシ。我ニ天之恵ミ薄ト可知事也。去ハコソ「孔子モ不遇時顔淵モ不幸也」ト古ヨリ申伝侍リヌ。

①難レ叶由(大)

一 元和寛永ノ比、藤堂大学頭殿家頼ニ、彦坂加兵衛ト云フモノアリ。親ハ紀伊大納言殿ニ在テ、遠州新居近辺ノ代官役ヲ勤タリ。加兵衛ハ故有テ、紀州ヲ立退、大学頭殿ニ勤仕シテ、勢州阿野津ニ数十年ヲ経タリ。其以後紀州勘定役人ヨリ、「其方親父、遠州新居代官ノ時ノ勘定算用今ニナシ。算用可有由ヲ申来ル。家中朋友ノ輩、聞者皆驚テ、「扱々笑止成事故。数年過シ事ナレハ、算用何トシテカハ不相成」ト不謂者ナシ。加兵衛ハ少モ不驚。其故ヲ問フニ、「氣遣召サレナ」ト云テ、下人ニ割符ヲ持セテ、京都ニ上セテ預置シ帳ノ入りタル長櫃へ、銀子十三貫目革袋ニ入タルヲハ請取テ、紀州勘定所ニツカハス時ニ、算用少モ不違由ノ手形ヲ持テ、下人販宅ス。右朋友ノ面々、「扱々日出度。殊更、常々貧ニシテ不如意ノ身ナリ。十三貫目ノ銀ヲ能不遣シテ、堪忍セシコトヨ」トテ感心ス。加兵衛云ヤウ「元ヨリ、人ノ物ヲ可遣ヤウヤ有。亦、算用ハ合ヤウニ仕タル者ノ不合ト云事不可有。日出度モ不侍」ト云。程経テ、和州ニ大学頭殿ノ領知五万石程在シヲ、加兵衛ニ預給ヒ、仕置ヲ任セ給フト云々。

誠、「知者不惑、勇者ハ不恐、仁者ハ不患」トモ可謂者也。

一 天正・文祿ノ比、筑紫豊後大友屋形ニ宗像掃部・白杵右京ト云テ、知行五千石程ツ、取者アリ。此兩人或時風呂ニ入ル。掃部ハ少弱ナル男、右京ハ大兵ニテ力量勝タリ。右京、掃部カ少弱ナルヲ見テ、「扱々、掃部殿ハホソキコト哉」ト云。掃部下帯ニ朱鞘ノサスガヲ指テ風呂ニ入ヲ、人々「是ハ如何①」ト問ヘハ、「垢カキ篋ナリ」ト云テ、小風呂ヨリ出テ、サスガノ竹ベラヲ拔テ垢ヲ

コソゲ、ル由。右京、掃部ヲ又、「扱々細キ事カナ」ト云。掃部ハ心ニ懸ケレトモ、其色ヲモ不出シテ在シ。其後、兩人上リ場ニテ髪ニ香ナト留サセ居ケル所ニテ、又「掃部殿ノ御手ハ細キ事哉」ト云シ。其時、掃部云ヤフ、「是無ハ何トモ成間敷」ト云テ、脇指ヲ戴テ、腰ニ指時ニ右京モ氣ニ懸テケルカ、後ヨリ掃部ヲヒタトイタキ、「カヤウノトキハ、如何仕給フ」ト云ケレハ、掃部イタカレナカラ傍ナル壁ニセリ付テ、脇指ヲ拔、自身ノ腹ヲ突通シ、右京諸共ニヒタグリニクル。其時、人々取分ケレトモ、兩人共ニ其坐ニ死ス。然レトモ、掃部カ手ハ下ニ当リ、右京カ手ハ上ニ当ケル故、右京ヨリ、掃部カ死スルハ少程有ト云々。去レハ、劣レルヲモ早マサレ、増レルヲモウラヤマサレトハ、此謂哉。掃部利ナレハ、垢カキノ竹篋ニテモ人ノ一人斗ニハ仕負マシキ男也。右京ハ、増テ大兵ト云、力量人ニ勝レタレハ、人ヲ不侮ハ、蚩負事ノアラシヤ。可勵、ツ、シムヘシ。

①「二」(大・金)

一 関白秀次公御生害之刻、熊谷大膳ハ於ニ北野切腹ス。家頼岡本何某、後ニ弥一右衛門ト号ス。兎角ノ事ヲモ不知シテ、他所ニ行テ在シカ、他所ニテ我主ノ熊谷殿、只今於北野切腹有ノ由ヲ聞テ、任レ足テ走付テ見レハ、只今ト思フテ庭ニ畳ヲ敷ニ坐シ給フ所へ、一ツ息ニ成テ駈付タリ。大膳是ヲ見給ヒテ、甚賞美シテ宣フヤウ、「軍ノ先ヲ蒐ル者ハ有トモ、今如此成果ンズル主ノ先途ヲ見届ント駈付ル者ハ鮮カラシニ、其志最深切也」ト感心シテ切腹アリシト云々。

誠ニ有義有忠有勇。世ニ主ノ為ニ命ヲ捨ル者ハ世々多シトイヘトモ、是ヲサヘ無義者ハ、主ノ足本ヲ守テ落フレタル主ヲハ見捨テ、強方ヘ降参スル族也。義ノ弱キ者ハ落散セン。是ハ、他所ニ在テ駈付タル事ハ殊勝千万ナリ。忠義ト可謂。誰々モ主ヲ持テ此志ナカランハ武ニハアラジ。

一 松平若狭守殿家頼二、辻右衛門ト云者、未夕若キ時、牢人ニテ在シ比、所用ノ事有テ京都ヲ出テ丹波ヘ行ケルニ、京都ノアフレ者トモ七・八人、庄右衛門ヲ念懸、京ヨリ付慕、桂川ノ川原ニテ「其者遣間シ。命惜シクハ刀・脇指・巾着等マテ置テ行」トテ追懸タリ。庄右衛門ハ一人ナレトモ自体勇氣ナル男ニテ、何トモ不思議ヲ得タリケレハ、川原ニ打シキテ待所ニ、七・八人ノ者共刀ノ我先ニト進来ル処ヲ、川原ニ有レ之所ノ手比ナル石ヲ以テ、真先ニ進来ル者ノ真向胸板一ツモ不外打當ケレハ、不得進シテ周章フタメク所ヲ刀ヲ拔テ追ケレハ、一人モ不返シテ京ノ方ヘ逃去ヌ。庄右衛門ハ事故ナク丹波ヘ越ス。時ニ取テノ働、礫モ重宝ニ成シ。去レハ、何ニテモ人ニ勝レタルヲ芸ナリト古ヨリ申伝侍ル。礫テ敵ヲ防クト云ヘハ、童敷事ノヤウニ聞ユレトモ、願胸ナトニ石礫ノ大ナルヲ打當ンニ、ナジカハ①タマランヤ。武芸ニヨラス、何ニテモ人ニ勝レン事ナラハ、習覚ヘキ事也。サラハ、戸田流ノ兵法ニハカヤウノ事ヲ「セウガウセツ」ト名付テ、伝受スト云云。

①「タマランヤ」(大・金)

一 江州志津力嶽合戦ノ時、其主人ヲハ不覚、榊左馬介ト云モノ、上方勢ノ中ニテ柴田三左衛門ニ被追立テ、三町余モ敗軍ス。其中ニテ左馬介モ被追立テケルカ、余リニ息ノキレケレハ、小川ノ有ニ下リテ水ヲ吞ケルトキ、我指物ニ我名、名字ヲ書付ケルガ、水ニウツリテ見ヘケル間、其ヲ見、「扱々無念ナル事哉。我名字ニ恥ヲ与ヘタリ」ト思、取テ返シ討死セスンハ、此恥ヲ難雪ト思ヒテ、逸ル軍押分々々、静ニ取テ返ス。二町余モ返シヌル比ヲヒコソ、御旗本七本鎗之衆横相ニ懸テ鎗ヲ入ケレハ、三左衛門力軍勢又打負テ、敵ヲ追討ニハシケルトカヤ。味方ノ軍勢被追立テ敗軍シケル中ヲ、押分々々取テ返シケル有サマ、最ユ、シク見ヘシトカヤ。其以後方々渡リ奉公シテ、高知行ヲ取テ人ノ崇敬セシ人也ト云々。誠ニ是ハ其恥ヲ思テ返シヌルコトハ、名ヲ貪ルニ似タリト云ヘト

『功名咄』一(上卷ノ上)

モ、左ニハ非ス。名ヲ思モ中人以上ナリ。愚者ハ五尺ノ身ヲ愛シテ、五尺ノ身ト数代ノ家名ヲ亡ス。彼者ハ名ヲ思ヒテ、身捨タリ。故ニ名高ク、家ヲ起シテ人は崇敬ス。上品ノ人モ名ヲ捨ルニハ非ス。然トモ、名ヲ取ラントハ不思。唯仁義ヲ宗トシテ、日夜朝暮ニ孝貞・忠信ノ道ヲ心ニ嗜ケル。故ニ、主親ノ為ニ捨レ命コトハ、鵝毛ヨリモ軽ク、常ニ身ヲ全ク慎ニ姓名ノ事ハ、盤石ヨリモ重シ。

此故ニ、「名ハ自ラ容ニ影ノ添カ如シ」ト云リ。大唐ノ古人、「死後ニ名ノ不残ヤウニセマホシキ」ト謂シ事ヲ、我朝マテモ云伝テ、其名高ク侍ル。此旨ヲ能存ヨ。

一 加藤左馬介殿家頼、數与左衛門ト云者、高麗陣ニテ番船乗取給フ刻、此与左衛門、番船ニ乗リ移ルノ所ニスヘリテ、海ニ落タリ。与左衛門、海底ニテ思フヤウ、「此船ハ繫船也シ。碇綱可有」ト思出シテ、四方ヲ尋廻リケレハ、アヤマタズ碇綱ニ尋當テ、綱ニ取付テ繰上ル。故ニ、希有ノ命助タリ。此与左衛門ハ相州山中城乗ノ時モ、渡部勘兵衛ヨリ先ニテ有シカトモ、与左衛門ハ溪ヲ蒐リケル故ニ不見。勘兵衛ハ山ノ尾崎ノ嶺通ヲ蒐リケルニ依テ、秀吉公御旗本ヨリヨク見ヘテ、御褒メ被成。故ニ、世上ニ勘兵衛名ハ高シ。此与左衛門、十死一生ニ煩テ、及末期ケル時、勘兵衛、為見廻ニ参調ス。与左衛門云ヤウ、「先以テ御出過分ニ候。扱山中城責ノ時ハ、先ハ我ニテ有シ。我死後ニ貴殿我ヨリ先成シ」ト御申シ有ナト謂シト云々。

誠ニ大剛ノ者ト可謂。死ヲ少モ恐ル、心アラハ、最騒ナン。海底ニ落テモ不周章、碇綱可有事ヲ思ヒ出ス事、微妙ト可謂。昔モ大串次郎、馬放テ宇治川ヲ渡リ、建武ノ比、赤松・桂川合戦ノ時、小寺相模馬放テ桂川ノ水底ヲ渡ケルコト有ト云ヘトモ、海ト川ト一ツ口ニハ難云。自体水練之上手ニテ有シハ知ラス。殊勝ト可謂。去ハ川ノヘタテ、及合戦事毎度ノ事ナレハ、馬放テ水底ニ沈

ム事有マシキコトニモ不有。万一左有時ハ、水上ヲ左ニ当レハ、敵方ノ岸ニ上ル。水上ヲ右ニ当レハ、味方ノ岸ニ上ルト思量シテ、命ノ有ン程ハ精ヲ出シ、水底ヲ渡リテ見ヘキ事ナリ。精尽テ死ナンハ不及是非ニ所ナリ。武士タランモノ、是等ノ事迄モ、心ニ不味、難遂功ヲカラン歎。

一 慶長ノ比、森美作守殿、美作ノ国拜領有テ城可有。城取立由ニテ津ノ山城一里斗外ニ、因ノ城ト云所ニ普請有ル。普請場ニテ、家老各務四郎兵衛ト云モノ〔其名字ハヲボヘス〕彦兵衛ト云者ト喧嘩シ、彦兵衛ヲ討テ家ニ皈ル。但シ美作守殿ハ在府ニテ御留主也。四郎兵衛モ深手負テ、次第ニ弱ル。然ル所ニ一類ノ歴々在トイヘトモ、不付氣モ所ニ、四郎兵衛知行所高田ト云所ハ、城下ヨリ五・六里モ有。彼所ニ居住セシ老分ノ者各務喜兵衛ト云モノ〔但是モ一族也〕、土俵鞞ヲ付弓持テ、裸背馬ニテ駈付ル。廣間ニテ弓鞞ヲ納、四郎兵衛力前ニ来テ云ヤウ、「殿ハ、廉キ事ヲメサレタリ」ト云。其トキ四郎兵衛眼ヲ開キ、「喜兵衛力早く来ル」ト云。「其方ノ如申彦兵衛ヲ微塵ニシタリ」ト云。「扱々能メサレタリ。何トシテ腹メサレンズ。其ハ能ランヂヤラズ」ト云。其時四郎兵衛、「誠ニ腹ヲ切ン」ト云。喜兵衛、「如何ニモ能ランヂヤラズ」ト云テ、則四郎兵衛力手ニ持添テ、腹ニ突立引廻シ、則額ヲ抱テ介断シ、三方ニ居置テ、一類并ニ家頼ノ面々ニ焼香到サセ、其身モ縁ニ出テ追腹セントセシヲ、人々諫ケレハ、理ニ腹シテ留ル時ニ、落涙甚シ。然トモ涙ヲ留テ不歎ト云々。

実ニ至功ト云ヘシ。四郎兵衛深手負テ死セハ、相手ニ少シハ功有ノ理アリ。自殺スレハ相手ノ功ハナシ。カ、ル所ニテ連トモ、遁又所ヲ知ザランハ知ニハ非ス。不愚出ハ才ニハアラス。

一 各務四郎兵衛喧嘩之節、舎弟各務左門ハ津山城下ノ宿所ニテ馬ノ湯洗セサセテ見居タル所ニ、喧嘩ノ由告来ル。左門廣間ニ有、大

身ノ鎗押取、洗轡ニテ裸背馬ニ乗駈付ル。四郎兵衛ヲハ家中ノ面々、「彦兵衛ヲ殺シメサレタ故ニ御切腹アレ」トテ、鎗・長刀ノ鞘ヲ脱シテ取巻。左門是ヲ見テ、「四郎兵衛程ノモノ、爰ニテ切腹スヘキヤウヤアル推参者」トテ追払、四郎兵衛ヲ駕ニ乗セテ宿所ニ皈ル。家中ノ面々、「彦兵衛ヲ殺シ給ヒ退給フハ御比興ナリ」トテ追懸ル。左門ハ馬ニテ大身ノ鎗ヲ打振、大勢ヲ追払引退所ニ、津田勘兵衛ト云者、自体少乏成男ナルカ、刀ニ手モ不掛、十四・五歳ニナル草履取一人召連、四郎兵衛駕ノ跡ニ付来ル。左門是ヲ見テ、大身ノ鎗ヲ突懸、「推参者、跡へ退去レ」ト云。勘兵衛云ヤウ「日比彦兵衛ト咄タルコト無隱。突度ハヨツキヤレ。我ハ四郎兵衛殿ノ落着ヲ見ニ罷」トテ少モ不退。流①名左門モ鎗ニテ突コトモナラス。無難四郎兵衛宿所迄送届テ云ヤウハ「宿所へ御入ヲ見届申候。是ニ御坐有面々預申也ト、必腹ヲメサレスンハ御比興ニテアラズ」ト云テ皈ルト云々。大勇ト可謂者歎。

①三本とも「流名」だが、「流石」となるべきところか

一 亀井能登守殿家頼、新井七兵衛ト云モノ、寛永・正保ノ比ヲヒ、横目役申付ラル。七兵衛家中ノ過有面々ニ向テ云ヤウ、「如此義ヲメサレタト風聞有。其ハ沙汰ノ限成義ナリ。重テ於有左ハ上ヘ申上、切腹セサセ申ヘキ者也。向後御嗜ミ可有由ヲ断ル」ト云ヘトモ、上ヘハ不申通。被断タル者ハ、理ニ服シテ向後過ナカランコトヲ嗜シ。皆事ニ依テ、品々ヲ分テ断シ。家老ニ田湖主水ト云者云ヤウ「其方横目役也。何トシテ家中ノ善悪ヲ不謂」ト云シ。其時七兵衛云ヤウハ、「誰ハ能御奉公仕ル者也。被有御加増侍レ。誰々ハ御奉公ニ精ヲ出スモノナリ。亦誰々ハ智者ナリ。其役此役被申付可然者ナリ」ト云ヘリ。扱少モ依怙鼠鼠ナシ。家中ニテ怪我・過有者ヲハ不謂。其後又主水云ヤウ、「家中ニ悪キ事モ可有。何トシテ不謂」ト云シニ、七兵衛云ヤウ、「家中ノ面々并テ賢ニ不有。怪我・過為問敷事ニ非ス。聞給ヒテ何ノ用ニカ仕給。

「結句邪魔ニハ可成」ト云フ。「殿ノ御為ニ不可然」ト云テ、終ニ不謂。又或時主水云ヤウ、「七兵衛程兎角ノ事、不謂横目ハ在間敷」ト云。其時七兵衛云ヤウ、「主水殿ハ侈リメサルト云。専ラ家中ノ取沙汰ニテ侍ル。御嗜可有。殿ノ御為可然事ニ非ス」ト云シト云々。此故ニ七兵衛力詞ヲ以テ立身セシ者ハ多く、人ノ損セシ事ハナカリシト云々。

誠ニ能思案ト可謂者也。人并テ愚成ハ多く、賢成ハ少。怪我・過ヲ一々上ニ知ラセンニハ、結句人ヲ事フ邪魔ト可謂モノ也。左イヘハトテ大悪ノ人、又ハ逆心ノ者アラハ、七兵衛程ノモノ不謂ト云コトハ不可有。又是ハ小悪也ト云ヘトモ、始終御家ノ為大悪ト可成事ナラハ、可謂事勿論ナリ。殊勝千万ナル勤様ト可謂モノ也。唯武士ハ第一勇、第二智、第三仁也。此七兵衛ハ智ト仁ト勇ト兼備セシ者歟。下ノ過ヲ上ヘ不通、能者ヲハ謂シハ仁也。能勤ヤウヲ知ハ智也。家老ノ侈リヲ諫、家中ノ怪我・過有者ヲ断リシハ勇也。無勇ハ侈ル家老ヲ諫メ、過有者ヲ断事モ難成カラシク。

一 尾張大納言殿大坂御陣ノ時

権現様御旗本ノ前ニ不成御借。

大納言殿御先備何ノ事モナキニ、ヒタ崩ニクツレテ、大納言殿ノ御旗本迄崩懸。御家頼ニ小野澤五郎兵衛ト云モノ、鎗ノ鞘ヲ脱シテ、「比興成者共哉。敵モ不見ニ何トシテ崩レカ、ルソ。味方トハ云セマシ。突ソツ々<sup>①</sup>」ト云テ鎗ヲ振廻シケレハ、過半踏止リ、旗本備ヘ不崩入ケレハ、旗本備ハ不崩。以後ニ大納言殿宣フヤウ、「五郎兵衛力手柄ハ一番鎗ヨリモ強シ」ト甚賞美シ給フト云々。誠以テ大忠ト可謂者歟。去ハ昔、楠正成力軍ノ法ニ「味方先陣ニ討チ負テ崩シニ、味方ニノ備ノ大鼓ヲ打テ進時、先ノ討負タル味方ノ軍勢ニノ備ヘ崩レ入時ハ、共ニ崩ル、モノ也。味方ノ備三間先ニテ取テ返サンハ大剛ノ者ナリ。自然味方ニノ備ノ中ヘ逃入ラバ、味方ト云トモ打テ捨ヨ。味方討ニ非ス」ト法ヲ出セシトカヤ。能此意ニ相叶フモノ也。故ニ善悪ハ百世ト云ヘトモ不替ト云ヘシ。

『功名咄』一（上巻ノ上）

善事ハ善事、悪事ハ悪事ナリ。

①三本とも「突ソツ々」であるが、「突ソツ々」となるべきところか

一 御宿越前守ト云人ハ、大坂ニテ一備ノ大将タル人ナリ。落城ノ時分、我人数ヲ引テ退給フ所ニ、寄手ノ武士一騎乗カケ、「御宿越前ト見付申タリ。引返シ勝負シ給ヘ」ト言葉ヲ懸ル。其時越前、我人数ニ向テ云ヤウ、「何レモハ引退給ヘ。人手ニハ懸マシ。真向切割シ」ト云テ鎗ヲ捨、太刀ヲ拔テ真向ニ指カサシ、馬上ニテ取テ返シケル所ヲ、鎗ニテ突落テ首ヲ取ケルト云々。我若年ノ時、功有武士ノ物語ヲ聞シニ、喩喧嘩・口論ニテ人ヲ討テ立退ノ所ニ、跡ヨリ傍輩ノ面々追懸來テ、「何某、返シテ勝負ヲセヨ」ト言葉ヲカケヌルトキハ、迎モ遁ヌ所ナリ。左様ノ時ハ、尋常ニ言葉ヲ返シテ、刀ヲ拔テ討レテ死スルヲ武ノ情ト云トソ教ケル也。其後、越前守討死ノ為<sup>①</sup>休ヲ聞テ、其情ケ有シ心底ヲ感信シ、落涙尤甚シ。

今是ヲ書留ヌルニモ、アハレニ覚ヘ侍ル。吾、是ヲ感信スト云ヘトモ、万一及其節<sup>②</sup>テハ如何ハカリ欲心出テ、情有間敷モ覚束ナシ。往昔ノ越前ハ、其志ヲ達スル。故ニ今ノ世ニ至ルマテ哀ニ聞ヘ侍ル。情ナクテ討死スヘキト不思ハ、鎗ヲ捨テマシキコトナリ。鎗ヲ捨テ太刀ヲヌケケルコトハ、武ノ情ヲ顯ントヲモフ所ナリ。尤殊勝ト可謂者歟。

〔此武士、井伊掃部頭殿家來、野本右近ト云モノナリ。右近親ト越前親ト知音ニテ有シ故、合戦ノ最初、陣中ヘ忍テ一騎來リ云ヤウハ、「今度、我越前一國可給由ノ約束ニテ御城ヘ參タリ。則、名ヲモ越前守ニ被成タリ。此名、面目身ニ余リ思フ所ナリ。大坂ノ御利運無シハ必討死スヘキ」ヨシ語リシトナリ。故ニ右近武士振ヲ見知テ覚、言葉ヲ掛シト云フ説アリ。以後、越前守光長家頼トカ。越後没落ノ越後記ニミヘタリ。〕

①「為體」（大・金）

一 武田勝頼滅亡之節、信州高遠ノ城ニハ、舎弟仁科五郎殿、小山田備中守楯籠ラル。数度ノ戦ニ勝テ、織田城之介殿旗本ノ歴々、塀際マテ責ルト云ヘトモキビシク、矢・鉄炮ニテ防キケルニ依テ、塀ヲ不得乗、屈極シテ在シ所ニ、森武蔵守殿〔其比ノ名勝蔵ト号〕家頼ニ、各務兵庫ト云者殿しんがりぞなえ 備ヨリ一騎乘リ抜ケテ馳寄ケルカ、時分ヲ見斗ヒ、屈極シテ在シ中ヲ「倍臣御免」ト云テ塀ヲ乗ル。旗本ノ歴々、此詞ニ付テ一同ニ塀ヲ乘テ落城シタリ。其後、「今ノ倍臣御免ト云テ一番乗シタル者ハ誰カ者ソ。我々カ者カ何者ソ不知ト穿鑿シテ、各務兵庫ト云事ヲ知レリ。徒者ノ功者ト云ヘシ。此兵庫ハ一代二三十七・八度程場数有シ者也。後ニハ身ニ當七千石、寄騎共ニハ一万石ニテ先陣ヲシタリト云々。サレハ、城乗又ハ一番鎗ヲ入ル塩、別テ習ト云伝侍ル。然トモ世長久ニシテ、其事絶テ知レル者ナシ。我モ其塩相ヲ不知、又誰有テカ末ノ世ニ伝シ。城乗ノシホ、一番鎗ノシホ、不得習ト云トモ、難事ニモ不可有。唯胸中ニ問テ思案工夫セハ、不当トイヘトモ遠カルヘカラス。問ニ、得タリ顔ナルモノ有トモ、理ニ不当ハ難用。此旨ヲ以テ了得シ給ヘ。武士道スキニ非スハ、功ヲハ難遂。

一 森武蔵守殿家頼、各務吉左衛門ト云者アリ。天正年中、武田勝頼滅亡ノ後、武蔵守殿信州川中島ニテ七千余石ノ知行所ヲ給フ時ニ、信長公御傷害ノ由ニテ、信州ヲ引退給フ所ニ、在々ノ百姓共一揆ヲ起シ、道ノ難所ニ出テ道ヲ遮リタリ。各務ノ一族共ハ毎モ先陣成ケレハ、先陣シケルニ、弓・鉄炮ヲ伏テ待懸タリケレハ、可通ヤウモナシ。殊更外二道モナシ。時ニ各務吉左衛門一人一揆ノ中へ歩ミ行テ云ヤウ、「我一族先陣ナリ。恨ヲ含モ理トハ云ナカラ道外ニナシ。是非々々、不通於テハ、一人モ不殘乗込テ討死スヘキ覚悟ナリ。同クハ通セカシ。通ス間敷ヤ否ヤ」トイヘハ、一揆ノ者共評談シテ、「誠ニ武士ノ思切テ討死ト極テ乗込ニハ、ナジカハ瀧ランヤ通參セヨ」ト云。左有二於テハ人質ヲ出サンニ

ハ、輒難通ト云。又一揆ノ者共評談シテ人質ヲ出時ニ、人質二人ヲ捕テ販リ、後陣迄此由ヲ通シ、各務カ先陣ヨリ次第ヲ守テ段々押通。扱一里余行廣所出テ、「人質ヲ返サン」ト云シニ、武蔵守殿宣フヤウ、「今度、百姓共一揆ヲ起シテ道ヲ遮シ事、悪キ奴原哉。無念ノ所存也。一々ニ首ヲ刎ヨ」トテ首を刎ラレタリ。扱世静テ、信州ニテ余ノ所ヲ 権現様ヨリ被下ト御意也シカトモ、「本知可申請。一揆ヲ起セシ遺恨今ニ有」トテ申請、一揆ノ奴原三百余人ハリツケニ掛タリ。故ニ遺恨有。地頭ハ悪シトテ、知行所ヲ替給フト云々。

一 實ニ、吉左衛門カ武略ニ依テ亡難ヲ避給ヒケルコト、忠義大功ト可謂。乍去、武ノ本意主従共ニ不レ至ト可謂者歟。不可諭ト云トモ、太閤様未タ藤吉郎ト申セシ御時、信長公ハ尾州清洲ニ御坐アリシ比、濃州ヲ侵掠シ給フトイヘトモ、敵畏テ不從。此故ニ評定テガウド、洲保ノ大河ヨリ向ニ構ニ城、敵ヲ退治セントアリシ時、秀吉ノ謀言当凶事ヲ用給フテ秀吉ヲ將トシテ野伏共ヲ数多カタラヒ出張セラル。扱其後、濃州宇留島ト云所ニ大沢次郎左衛門ト云テ、大剛ノ者アリ。此者有テハ、濃州退治難仕。故ニ、藤吉郎殿一人彼宅ニ入テ云ク、「信長公ノ御威風追日強シ。貴殿楯ツクトモ不可叶。我、今度此表ノ大将トナツテ向タリ。願ハ降セヨ。降ス間敷ニ於テハ、無是非有無ノ一戦ヲセン」ト云。彼者云ヤウ、「信長公ハ旧惡ヲ不ニ忘給。降セハ亡命無疑。与君一戦ヲ快クシテ死セン」ト云シトキニ、藤吉郎殿ノ曰ク、「左宣フ事、尤至極セリ。乍去、我其使トナツテ降セハ、命ノ事ニ於テハ少モ氣遣シカラス。其故ハ、我ヲ人質トシタマヘ。我、必君ノ人質ト成テ命ノ事ハ可申請ノ間降シ給ヘ」ト云。左有ハ本領安堵ニ於テハ、可降由ヲ申ス。其時、信長公ヘモ此由ヲ申、互ニ数通ノ起請文ヲ取替テ降シ①ス。其後、信長公ノ御前ニ出給フトキハ、必ス藤吉郎殿不放、傍ニ付テ出仕給フ。信長公御癖ニテ有シ間、可討トセラレケレトモ、藤吉郎殿ニ付テ在テ不被討。程経テ、信長公ノ御



意モ解給ヒケルトナリ。故ニ、無程濃州御手ニ入シト也。夫ヨリ藤吉郎殿御使ニテ降スル者多く、頼母敷思フテ從者多カリシ、故ニ、威風日々ニ強ク、国郡從ヒキ。是ヲ以テ彼ヲ思フニ、吉左衛門モ二人ノ人質ヲハ命ニ替テモ無恙戻スヘキコトナリ。亦、武蔵守殿モ怨念ヲ止テ二人ノ人質ヲハ飯シ給フヘキコト也。

世静テ後、三百余人張付ニ仕給フモ、仁者ニ非ス。我過ヲ不謂、人ヲ殺スハ不仁也。責テ其中ノ棟梁タラン者十人余程殺給フトモ、見ゴリニハ成ヘシ。小器ノ致ス所ナリ。古語曰、「我ニ敵スル者ハ敵ニ非ス。我ニ有」ト云云。我ニハ悪行ヲ仕ナカラ、諸人ニ能思レント謂シニ同シ。但又義ニ依テ起セシ一揆ナラハ、妻子眷屬マテ樞切ニシタリト云トモ、恐ルヘカラス。一旦ノ恨ニ依テ起タランハ、其棟梁タル者斗切タリトモ、見ゴリニハ成スヘシ。兎角、人ノ命ヲ取ランコトヲハ能々慎ミ給ヘ。

①「ヌ」(大) ②「ヌ」(大)

一 文祿・慶長ノ比、森武蔵守殿家頼、大塚主膳ト云者アリ。美作守殿信州高遠・小室兩所被為知行ケル節、主膳カ親ハ高遠ノ城ヲ預テ在城ス。主膳ハ近習ニ被召仕、小室ニ在シカ、所用ノ事有テ高遠ニ行<sup>①</sup>ス。高遠ノ城ハ山城ナリケル故、植込ヨリ山ニツ、キタリ。其夜、囿ノクサノ間ニ寐ント云シニ、兎小性共私語ケルハ、其間ニ化者有テ寐者ヲ必タブラカシヌル由ヲ云リ。主膳ハ若キ者ナリケレハ、「何タハコトヲ云ヤ」トテ不聞。年老タル者モ「不入義ニテ侍ル」ト再三諫言シケレトモ「ナニ左様ノ事可有」ト云テ寐ス。其夜、何者トハ不知、終夜主膳カ寐タル上ニ上リテ、息モ絶ヌヘキ心地シテ東雲ノ比ヨヒ、何国へ行トモ不知成<sup>②</sup>ス。主膳ハ無念ノ事ニ思ヒケレトモ、可為様モナクテ、其日ニ可飯兼約ナリケレトモ、兎角ニ事ヲ寄テ留ヌ。又、先夜ノ如ク同中脇差ヲ抜テ、小夜ノ物ノ下ニ隠シ、小夜物ノ下ヲ足ニマトヒ、踏脱事安キ如ニシテ、小モ不睡シテ待懸ル所ニ、子ノ半刻ニモ成<sup>③</sup>スラン

『功名咄』一(上卷ノ上)

ト思比ヨヒ、頻ニ眠ク成ヌ。主膳思フヤウ「化物定テ今来ルヘシト云事ニヤ」ト思テ、氣ヲ静メテ少モ不眠シテ待懸所ニ、一村雨夥敷降テ風吹渡リ、木々ノ梢ヲ鳴事夥シ。扱何トハ不知縁ノ上ニ上ル足音ス。則腰障子ノ掛金自ラ脱レテサラリト明ケ、主膳カ上ニヒタト上ル。其時、主膳小夜物ヲ踏脱ヤイナヤ、ヒシト切ル。化物切レテ飛退ヨリ早ク飛起テ、障子ヲ指塞キ、掛金ヲ掛タリ。扱次ノ間ニ寐タル小性共ヲ起シテ「蠟燭ヲ持来レ」ト云シニ、親其声ヲ聞テ十文字ノ鞘ヲ脱シ、手燭ヲ持テ来レリ。主膳云ヤウ、「何物トハ不知、疵ヲ負セタリ。先手燭斗入給ヘ」ト云テ、戸ヲホソメニ明テ手燭ヲ入テ、扱後ニ親ハ入ヌ。脇指ニノリハ付テ有ケレトモノリヲ不引。乍去、「此間ヨリ外ヘハ出間シ」ト云テ尋廻リケルニ、一円ニ不見。不思議ノ思ヲナシテ見廻所ニ、見廻者ノ跡ニ付テ、猿ノ如クナル影壁ニウツリケレハ、不見体ニテ取テ返シ押ヌ。見レハ狸也。前足ヲ一切ラレケルヲ、口ニクワヘテ血ヲ吸テ、血ヲ下ヘ落サ、ルヤウニシテ、人ノ陰ニ付テ廻リケルコト、畜生トハ謂ナカラ賢キ物ナリ。又来ル時ニ、一村雨夥敷降ケルト聞ヘシモ、何カハ不知。飛石モ濡サリシ事ハ、不審千万ナリト云々。扱、繫テ台所ニ置、四・五日人ニモ見セテ後ニ、殺ケルトナリ。

誠ニ精強ク、心カ強キトキハ成功、勢弱キ時ハ功ヲハ難遂。唯、武士ハ勇猛ノ心ヲ日夜・朝暮ニ可願求者ナリ。

①「ヌ」(大・金) ②「ヌ」(大・金) ③「ヌ」(大・金)

一 平野遠江守殿、山州伏見全盛ノ時分、伏見ニ居住セラレケル比、寐給ヒシ後、夜更テ炬路ノ戸ヲ明、ゲタヲハキテ飛石ヲ通り来ル者アリ。遠州不審ノ事ニ思ヒ、氣遣シサニ脇指ヲ抜テ障子ニ添待テ居給フ所ニ、踏石ニ上リ雨戸ヲ明テ内ヘ入ヲ月影ニ見レハ、得モ不被謂形也。障子ニヨリ添ケレハ、遠州内ヨリ障子ヲ明給ヘハ、内ヘ倒入ヌ。遠州、「人ニテハナシ」トミテ、脇指ヲ捨テヒタト

組取テ押へ、小性トモヲ呼給へハ、小性共来テ見給ニ、大成猿ナリケリ。其後、穿鑿シタリケレハ、近辺ノ屋敷ニ飼テ置タル猿ナリ。炉路ゲタト聞ヘシハ、首ニ指タル竹ノ筒ノ音ニテ有シ。兩戸ヲ明テ内ニ入テ障子ニモタレテ月ヲ見ケル所ヲ、内ヨリ障子ヲ明給ヒケルニ依テ、倒入ケルトハ一々後ニソ思ヒ合タリトナリ。其後、遠州ノ曰、「我ハ是ヲ七本鎗ヨリ手柄ニ思フナリ。其故ハ、遠州程ノ者カウロタヘテ猿ヲ切タリト沙汰有シ時ハ、七本鎗ヲシタルモ水ニ成<sup>①</sup>スヘシ。人ニ不有ト見テ、脇指ヲ捨テ組タリシ事、吾ナカラモ能シタリト喜悅不斜」ト云ヘリ。

誠以可感信義ナリ。龜忽ニ猿ヲ切給ヒナハ、ウロタヘ者ノ名ヲ得テ、七本鎗モ血氣勇ニテ仕タルヤウニ自ラ成ナン。兎角疑シキ者ナランニハ切ラザルニハシカジ。化物ヲ不切シテ逃シタリトテ、恥辱ニハ不可成。疑シキ者ヲ切テハ、大形ウロタヘ者ニ成ナンモノ歟。能々心ヲ静メテ事ヲ行ヒ給ヘ。昔ヨリ「化物ニ似テ左無事過乎世ニ多キ事ナリ。大形ハ心ニ恐懼ノ心有ハ、冷敷形ニ見ルモノナリ」ト古ヨリ申伝侍ル。故ニ、吾ニ少モ恐懼ノ心アラハ能々心ヲ静メテ思量仕給ヘ。

①二本とも「ス」であるが「ヌ」とあるべきか、あるいは「ナスベシ」と読むか

一 大久保彦左衛門殿ハ、大坂御陣ノ時、御旗奉行ナリ。御飯陣以後或時 権現様御意ニ「天王寺表ニテ、真田出張セシトキ、其方ニ預シ旗色ノ悪カリシ」ト上意ナリ。其時、彦左衛門被申上ケルハ、「イヤ〜、御旗色ノ悪キコトハ少シモナカリシ」ト申上ル。権現様「イヤ悪カリシ」ト上意ナリ。彦左衛門ハ、少モ悪キコトハ無之由ヲ達テ申上ルニ、依テ後ニハ殊ノ外御立腹有テ、天王寺表ノ絵図ヲ御取出サセ給、「コ、ニテカヤウニ旗色悪カリシ」ト上意ナリ。然トモ、彦左衛門情ヲ張テ、「イヤ〜、左様ニ御旗色悪キ事ハ怒々ナシ」ト云々。依テ、余リニ御腹ヲ被為立ケル

程ニ御近習衆、彦左衛門ヲ引立ケレハ、被引立ナカラ御前ナル絵図ヲ足ノ指ニテ挟ミ取テ、「左様ニ御旗色ノ悪キ事怒々ナシ」ト情ヲ張テ、①少モ少モ不負、被引立テ無是非退出シキ。後日、御老中参会ノ時被仰ケルハ、彦左余リニ上意ヲ兎ヤ角ト被申上義ハ、不入事ナリ。向後可為無用由ヲ被仰。彦左衛門被申ケルハ、「各ノ御存有義ニ非ス。吾ハ腹モ不立トモ、御為ト存テ申上レ。上様ニモ御合点悪シクシテ、左様ニハ上意ナリ。何ト御旗色ノ悪カリシニ極リテ、何ノ益ヤ侍ル。此彦左エ門カ上様トセリ合テヨカリシト申上シニ依テ、大形ノ人、扱ハ御旗色ノ悪クハナカリケルカ」ト云シハ御為ニテハ無御坐カ」ト被申シカハ、老中舌ヲ鳴シテ物不言ト云々。又或トキ、此彦左衛門殿、江戸ニテ或橋ヲ通給フニ、跡ヨリ喧嘩シテ退者ヲ追懸テ来リ。「其人、討留タマヘ、頼申」トテ追懸ル。其時、馬ヨリ下リ、鎗<sup>②</sup>ヲ鞘ヲ脱シテ「此橋ヲハ大久保彦左エ門カ堅メタ程ニ通ス事ナラス。脇町ヘ行」ト教テ遣シケルトナリ。扱跡ヨリ追懸来ル者トモニハ、「彦左衛門カ堅メタル橋ヲハ不通」ト云テ、其後馬ニ乗被行ケルト云々。

此彦左衛門殿ハ、数度ノ場数ハ有ナカラ、一向ノ荒夷ノヤウニ申伝ヘ侍レトモ、此ニケ条ヲ聞時ハ、一円ニ左ナシ。武ノ道ノ達人ナレハ、「角ヤサシキコトモ侍リケルヨ」ト感信スル所ナリ。乍去、花有時ハ実ノルコト常ノ道理ナリ。非可疑。又有恐申事ナカラ 権現様ニモ彦左衛門カ慮外ヲモ不改シテ、指置給フコト絶言語所ナリ。今時ノ主人ハ、大形ハ死ヲ可給者ナリ。其主人タニアラハ、被官ハアラントナリ。或咄ニ主ノ云ク、「世中ニ弁慶カ如キ者ナシ、ホシキ事哉」ト宣フ時ニ、家臣カ云ク、「惣別世ノ中ニ、義経程ノ主ナシ。義経程ノ主タニ有ラハ、弁慶ホトノ家臣ハ数多可有」ト云シトナリ。理至極セリ。

①「少モ少モ」は三本共通。あとの「少モ」は衍字。②「ノ」(犬)

一 天正ノ比ヲヒ、常州真壁ヲ知行セラレケル真壁道無ノ家頼ニ、石

島大膳ト云者アリ。其所ハ不覺、朝合戦ニテ敵・味方入乱レテ戦ケルニ、朝霧ニテ味方ノ人数ヲ引揚ヲ不知シテ、大膳一人敵中ニ有。中々引退ハ可被討体ニ見ケル間、敵中ニ紛レテ有シニ、敵モ疑ヒ氣ヲ付ル時ニ、大膳馬ヨリ下リ、馬ノ腹帯ヲシメナカラ云ヤウハ、「敵カ味方ヲハ眼ニテ見ヨ」トテ直シケル。敵モ是ニテ心緩ミケル時、大膳鞍ニ居直ヤイナヤ、諸鎧ヲ合テ駈抜ケル。然トモ、敵モ取合テケルカ、鎗ニテ鞍ノ後輪ノ突カジリ被突抜ケレトモ、無恙味方ノ陣ニ皈リシ。危カリケル命ナリト云々。

去ハ、武ノ家ニ生レン者、勇ナクンハ有ヘカラス。大膳勇ニ非ンハ恐シ。懼ハ争カ敵中ニ紛居テ、命ヲ助ラン。殊ニ敵疑テ敵カ味方カト云シ時、大形ノ者ナラハ馬ヨリ下事ハ得セマシキ事ナリ。不敵ナル男也ト可謂。常々死ヲ何トモ不思、気情有トモ其時ニ當テハ覚東ナシ。武ノ微妙ト可謂者欤。一生ノ内如此ノ働アランハ武ノ冥加ト可思者ナリ。

一  
〔此浮田某主人ハ其比備州天神山ノ城ニ居給ヒケルニ依テ①大神宗景ト号ス。本名、又ハ村上、又ハ浦上ト云々〕備前浮田殿元祖〔但、直家親〕浮田何某其親父ハ、為傍輩、被讒死。故ニ孤ト成テ、或在郷ニ伯母〔此伯母、備前西友寺ノ比丘尼ナリト云ヘリ〕ノ幽ナル体ニテ在シニ、被養育長生シキ。最早ハツ九ツ斗ニ成シ比ヲヒヨリ、近辺ノ在郷ノ子共ト不謂ル喧嘩ヲシテハ、毎度被踏被撃シテ、啼テ皈リヌ。伯母涙ヲ流シテ云ヤウ、「扱々、其方ハ不入所ヘ遊行テ、毎度被踏、被扣シテ啼テ来ルヲ、恥敷ハ不思ヤ。重テ不入所ヘ遊ニ行ナ。其方カ親ハ左様ノ者ニテハナカリシ」トテ、毎度諫教訓スレトモ、不止ケリ。伯母モ諫兼テ涙ヲ流ケル斗リナリ。或時、伯母又教訓シケルニ、折節傍二人モナカリケレハ、浮田ノ何某小聲ニナリテ云ヤウ、「吾、毎度被撃、被踏スルコトハ、好ニテハナケレトモ、我作法ヨク人ケ間敷長生スルト見聞ハ、父ヲ讒死セシ〔此敵ハ天神宗景ノ家老島村②覺阿弥ト云者ナリト

『功名咄』一（上卷ノ上）

イヘリ〕敵、余モ生テハ置マシト思フナリ。故ニ、イヤナカラ被踏、被撃仕リ侍ル」ト云シ。思召ノ所モ最至極セリ。「乍去此言必漏シ給フナ」ト伯母ノ口ヲ堅メ、其後モ近辺ノ在郷者ト不謂喧嘩ヲシテ、被撃、被踏スル事度々ナリ。故ニ、彼親ヲ讒死セシ者一円ニ氣遣セス。去程ニ浮田何某十七・八ニ成、其節彼敵鷹野ニ行テ暮ニ及テ皈ケルニ、浮田何某我親ノ刀・脇指ヲヒソカニ取出テ待懸テ、親ノ敵ヲ討③ス。夫ヨリ次第第二長生スル程ニ智謀・勇才勝人、後備前一國ノ主ト成テ、他國迄モ振其威、二・三代程被保シト云々。〔伝云、浮田保某ノ母宗景ニ奉公ニ出テ在シニ依テ、讒死ノ故悉ク詔ケルニ依テ、覺阿弥ヲ討ノ後如本家老トナリ、其後宗景ニ世継ナキニ依テ、自ら主ト成ト云リ〕

誠以英雄ト可謂者欤。幼少ノ時ヨリ左様ニ慮有事ハ天然ノ出来者ナラン。乍去楠正成ハ十一才ニ成正行ニモ、毎度合戦・智謀ノ物語ヲセシト有時ハ、徒ラニ養育センハ油断ノ義タルヘシ。武家ニ生レン者ニハ、幼少ヨリ其家ノ芸、并ニ義有道・忠勇ノ道ヲハ語教ユヘキコト勿論ナリ。鈍利ハ生付ナレハ、不及是非所ナリ。勢虚ニ非ンハ、生付三ツ四ツノ者ハ教ニ依テ、六ツ七ツ迄ハ可至者欤。

①「天」(大・金、底本の後出は「天」) ②「寛」(大・金、底本の後出は「寛」) ③「又」(大・金)

一  
小森伊豆ト云者、関ヶ原陣ノ時、西国方其主人ヲハ不覺、伊勢阿ノ津ノ城責シ軍勢ニテ寄ケルニ、鉄炮ニ当リテ手所ハ具足ノ向腹上帯ノハツレヲ被打抜タリ。人々、「手負タマヒ①ス。引退給ヘ」ト再三強テ云ケレトモ「イヤ先ツ」ト謂テ不引退。良有テ具足ノ脇ヨリ手ヲ入テ見ケレハ、玉ハ具足シタノ衣ト具足トノ間ニ有テ、取出ス。然トモ、腹ノ皮ハ大ニ腫テ痛タリ。以後二人ニ語ケルハ、「扱々、危キ儀ナリ。我一定手負タリトハ思ヒ②ス。然トモタメラヒテ居タル内ニ、如右玉ヲ取出タリ。手負タリトテ引退タラン

ニハ可失面目事ナリ」ト被語ケルト云々。此小森伊豆ト云シ人ハ、  
数度ノ場数有上、殊ニ武功ノ譽有テ高知ヲ取り、方々渡奉公シテ  
遊行シ人ナリ。

誠ニ以テ此旨思慮スヘキコトナリ。僂忽ニ手負タリトテ引退タラ  
ンニハ、無面目儀ナリ。武士程アヤウキモノハアラジ。一生能慎  
テ無恙可終事ヲ可願事ナリ。然トモ、時ニ当テ怪我有マシキモノ  
ニモ非ス。若シ恥辱アラハ実盛力勇ヲ可用事、勿論ナリ。

①ヌ(大・金) ②「ヌ」(大)

一 堀左衛門佐秀政ハ、元来ハ美濃ノ道場防主ノ子ナリ。織田信長公  
ヘ兒小性ニ被召出テ、近習ニ被召仕シ比、其名ヲ久太郎ト云シ時、  
兒小性共、毎年正五九月ニハ、武運長久ノ祈禱ノ為トテ、何レモ  
日待ヲシケルニ、今宵ハ誰カ日待、明日ノ夜ハ誰、其次ハ誰々ト  
定テ寄合・飲食シ、遊テ夜ヲ明シケルカ、或時、御次ノ間ニテ久  
太郎ニ向テ云ヤウ、「其方ハ何トシテ日待ヲセサル。何カ日待ソ、  
何レモ寄合テ遊ハン」ト云ニ、久太郎カ云、「我等ハ日待ハイラ  
ヌ」ト云。人々「夫ハ何ト云事ソ。武運長久ノ為ナリ。平ニセヨ」  
ト云。「イヤイラ①ヌ」ト云。人々、「扱々シハキ者カナ。是非ト  
モセヨ。皆寄合テ一夜遊ハン程ニ、是非々々セヨ」ト被責テ云ヤ  
ウ、「我ハ毎月六度ツ、日待スル程ニ、別ニ日待ハイラヌ」ト云。  
人々、「其方カ日待不聞馴、何カセン、誰カ行シ」トテ手ヲ扣テ  
笑フ。其時云ヤウ、「我ハ毎月御次ニ泊、御番ヲ致度毎ニ不寐  
日待ヲ仕ル間、別ニ日待トテ仕ル事ハ不入」ト云ヲ、信長公、一々  
②御聞被成御聞彼カ云分最モ至極セリ。乍去、実不実ヲ様シ可  
有御覽為ニ、久太郎カ寐番ノ夜ハ不時被成御呼、御用被仰付ニ、  
不遲不疾御返詞ヲ申上テ罷出ルニ、少モ寐タル体モナシ。「扱々、  
寄持成者哉」ト思召ケリ。其後、又或時、信長公雪隠ニ被成御坐  
シニ、久太郎御刀ヲ持テ、御供ニ參毎ニ御癖ニテ永ク雪隠ニ御坐  
在シマ、閑シサニ御刀ノ刻鞘ナリシヲ、ヒタ物算ヘケルトナリ。

其後、年経テ信長公被仰ケルハ、「兒小性共誰ニテモアレ、我刀  
ノ刻鞘ノ刻ノ数ヲ云当タ③テン者ニ取セン」ト御意ナリ。其時、  
兒小性共云当ントテ、「我ハ何程、彼ハ何程」ト云シ中ニ、久太  
郎バカリ不謂。亦信長公、「何トシテ久太郎ハ不云ヤ。数ヲ云当  
タランニハトラセン」ト御意ナリ。時ニ久太郎云ケルハ、「我等  
ハ御腰物ノ刻ノ数ハ能覚申タル間不申」ト云ヘリ。信長公御覚不  
被成体ニテ、「夫ハ何トシテ覚ヘタルソ」ト御尋有。久太郎云ヤ  
ウ、「先年御雪隠ヘ御腰物ヲ持テ御供ニ參ケル時、四・五扁算テ  
覚申タル由申上ル。夫ヨリシテ信長公律儀ニ奉公精ヲ出ス者也ト  
被思召入テ、次第ニ出頭セシトナリ。後ニハ、家老ノ④例ニ備テ  
分別者ニ被謂ン。

信長公御傷害ノ後、太閤様ヘ從ヒキ。太閤様御旅行ノ節ハ、久太  
郎殿ハ馬ニテ御供也シニ、久太郎殿家頼何某ト云者ヲ太閤様召テ、  
久太郎殿ヲ「毛坊主々々、今日ヨリシテ我上様ヘ被召出毛坊主ヲ  
ハ、主ニ頼マシキト謂」ト御意ナリ。是ハ、道場坊主ノ子ニテ有  
シ故ナリ。被官其趣ヲ云ニ、久太郎殿「悪ヒ奴目哉」ト云テ刀ニ  
ソリヲ懸、馬ヨリ下、其被官ヲ追払。夫ヨリ⑤宜ニ御輿ノ際ニ行  
テ歩行ニテ毎度御旅館迄御供セラレケルトナリ。

長久手合戦ノ時ハ、池田勝入父子・森武藏守殿・三好孫七郎殿御  
勢一万、堀久太郎秀政手勢五千余騎ナリ。権現様小牧山ニ御  
坐有テ、参河空国成事ヲ察、各参州ヘト志テ押行給所ニ、小牧山  
ニモ此由聞給テ、御勢ニハ大須賀五郎左衛門康高・榊原小平太康  
政・本多彦次郎康重・水野惣右衛門・丹羽勘助氏次、軍勢四千余  
騎ニテ小牧山ヨリ長久手辺へ出⑥過テ、一跡ニ備テ押行給フニ、  
三好孫七郎殿ノ御備ヲ切崩シ、追討ニ一里余追來。田中久兵衛ト  
云者、秀政ノ陣ニ來テ此由ヲ告ル。秀政怒テ云、「其方、我ニ告  
シ為ニハ來ルヘカラス。定テ戰場ヲ逃テカク云ナラン」ト云シ時  
ニ、堀丹後ハ先陣ノ將ナリケルカ、一騎駈來云ヤウ、「此所ハ山  
ノフモト、地形方サカリニテ場所悪シ。四・五町モ引退テ場所好

キ所ニテ敵ヲ待受テ戰ハ可ナラン」ト云シニ、秀政ノ云ク「イヤ  
く、其俣跡へ見向タル俣ニテ馬ヨリ下敷」ト下知ス。則使番ノ  
者、備々ニ相触、丹後モ爰へ來給程ニ、其俣居給、「備ヲハ跡ニ  
テ誰ニ下知セヨト云遣ス」ト云テ、自身乘廻云ヤウ、「今見給各  
ニ高名サセンスル<sup>⑦</sup>ヲ、我カ下知ヲ待給へ」ト云テ、本陣二飯給  
フニ、無程、大須賀・榊原・本多・丹羽衆、孫七郎殿軍勢ヲ切崩  
シテ勝ホコリ、秀政備ニ行懸間、一町五反斗モヤ有ラント思フ時、  
秀政再拜ヲ振テ下知ス。軍勢鬨ヲ発シテ懸ケル程ニ、敵ハ長追シ  
テ勞レ、味方ハ勇氣盛ナルニ依テ、又追返シテ追打ニシタリ。其  
時、權現様御籬本伊井万千代直政、長久手ノ巽ノ方ノ山ニ、  
彼是三軍ニ備給シヲ見テ、早々人数ヲ集退給フトナリ。權現  
様方ヨリハ乱テ逃シヤウニ見ヘケレトモ左ニハ非ス。余リニ敵間  
近故ニ早々マトヒテ被退ケルト云リ。

其後、弥立身シテ越後一州都合七十万石ノ大名ニ成給ヒシ。其節  
ハ、静謐ナレトモ、朔日・一日・廿八日ニ餅ヲツカセ、台ニ積  
セテ一人ツ、召出、自身被遣ケル。扱、其中ニ取ヤウノ作法悪シ  
キ者ヲハ、何カ度モ取直サセシ程ニ、自ラ躰方ヲモ習ヒ嗜シ。又  
毎晩ニ其日ノ用事・役儀ヲ聞テ、善惡ヲ正シ、毎日一役ヲサセス、  
替テ又「明日ハ何方へ行、何役ヲ被勤侍レ。頼申ス」ト云テ、常  
住兵ヲ練給ヒシト也。扱一月ニ、三度ノ二度不給レハ、「扱々笑  
止成事ナリ。彼者ハ暇ヲ不取ハ成間敷」ト云。家中ニ取沙汰セシ  
程ニ彼者モ暇ヲ云ニ、左衛門佐殿宣フヤウ、「我家斗ニテ世間ヲ  
不見モ惡シト被存テ、暇ヲ被乞ト見ヘタリ。夫モ若キ人ニハ尤也。  
何方へ成共濟度思フ所アラハ、口入シテ參ラセン」ト宣ヒ<sup>⑧</sup>ジ。  
扱亦、「跡銀ニ被致侍レ」トテ金拾両又ハ二十両ツ、被遣ケル程  
ニ、少モ可恨ヤウモナク、惡クイフヘキヤウモナシ。扱、主ヲ取  
テ先ニテ逢給ヘハ、「是ニ居給フヤ。我等所ヘモ時々ハ被參侍レ」  
ト宣シ。其主人ニ逢給フトキハ、「誰ト云者ヲ被召出トミヘタリ。  
以前、我等所ニモ居タリシカ能者ニ侍ル」ト宣ヒシ程ニ、忝ト不

存ハナカリシ。又「三百石ヨリ小身ニテハ、武ノ用ニ不足」ト云  
テ、<sup>⑨</sup>三百石ヨリ小身ナルモノナシ。此故ニ世ノ諺ニ、「左衛門  
佐殿家中ヲハ武士ノ高野」ト云シト云々。

此秀政ハ英勇トモ可謂者歟。第一ニ日待ノコト、陰徳陽報ノ理ナ  
リ。常々奉公也。精ヲ出サレシニ依テ、不慮ノ争ヒ出來テ其功ヲ  
顕ス。神道ノ奥旨ヲハ不知思テ見侍ルニ、闇キ内精進齋シテ陽  
徳ヲ待得ル如クニ、常々、陰徳ヲ行ヒナハ惡事ハ出來ンヤ。善事  
ハ益可來事勿論ナリ。秀政モ常々陰徳ヲ行ヒ給フニ依テ、不招シ  
テ幸來レリト知給ヘ。第一刻鞆ノ事、世人皆以欲心有。然トモ、  
欲ニ惑モ元來愚癡ヨリ生ス。人ハ第一律儀ニ非ンハ、何ノ用ニカ  
立ン。万卷ノ書読覺、智恵・才覚有トモ少ナリトモ、其心不実ニ  
テ盜心有人ハ、却テ冷敷<sup>すまじく</sup>怖シカランカ。愚鈍ナリトモ、律儀ナ  
ル男ニコソ交ヲモセマホシカランカ。然トモ、乱世ニハ盜有トモ、  
智謀・勇才有者ヲ不捨用テ、武備ヲ調事有トハイヘトモ、夫ハ  
唐<sup>⑩</sup>大ヲ飼ヌルヤウニ、能權ヲ用ヒテ人質ヲ取り、惡心ヲ不発ヤ  
ウニ可用モノナリ。

武田信玄、此旨ヲ用ヒ給ヒシニ、一生ツ、カナク被終ケレトモ、  
勝頼ノ代ニ至テ、皆惡心ヲ発セシ者多シ。中ニ義ヲ守テ死セン者  
ハ鮮シ。世ニ又其類多シ。可有御用心。朋友テシカナリ。此故ニ  
律義ヲ第一ト撰守ヘキコト肝要ナリ。信長公、不知顔ニテ様<sup>ため</sup>シ見  
給フコト、人ヲ仕フ心得ヘ名將タリ。第三ニ、太閤様戯レ給ヒシ  
ニ其被官ヲ追払、直ニ御輿ノ際ニ付テ步行ニテ供セラレケルコト、  
大身ナル者ニ步行ニテ供セヨトハ不被謂シテ戯レ給ヒシカ。又ハ  
秀政此戯ヲ便トシテ、御輿ノ際ニ行、步行ニテ供セラレケルカ、  
二ツノ間ヲハ不可過。去ハ敵ヲ知、味方ヲ知者ハ勝ト云シ。故ニ、  
飯初ノ戯ニモ心ヲ付ハ其徳有ナン。然レトモ、朋友ノ交ニ余リ氣  
付タランニハ、却テ其身ヲ害セン。能々思量シ給ヘ。第四ニ、長  
久手合戰ノ時、敵競ヒ來ニ、我備場惡シトテ場ヲ替ハ、其内ニ敵  
勢來ランニナシカハ善カランヤ。不替トモ、不慮ニ敵軍ヲ発シタ

ル故、兵氣不静ヲ悟テ、馬ヨリ下敷セタリ。此故ニ、敵ハ遠懸リ  
来テ兵勞、味方ノ不動ヲ見テ、弥アヤフム。味方ハ静テ敵ヲアヤ  
フマズ。又備ヲ自身見廻テ、「今見ヨ各ニ高名サセスルソ。吾  
下知ヲ待給ヘ」ト云シコト、是ヲコソ勇猛ノ法薬ヲ軍勢ニ吞セタ  
ルト云成ヘシ。又、敵競来所ヲ闕ヲ発シテ被懸シ事、敵ハヨクレ、  
味方ハ声ヲ発シテ勢ヲトル。一々義ニ当テ覚侍ル。是ヲソ將ノ見  
切機転トハ謂ナルヘシ。第五、世静テ後モ昼夜兵ヲ練給ヒシコト、  
人ニハ侈リト云病アリ。人々具足シテ有癖コトナリ。然所ニ一生  
武ヲ不忘、老後ニ至迄怠リ不給コト、武ノ手本トモ可成コト歎。  
コレヲ手本トシテ、不学事ハ奢ト怠トノ二ツ也。故ニ、此秀政遂  
功給シ事、不可勝計。左有ハ、此奢ト怠トヲ去テ油断有ヘカラス。

①「ス」(大・金) ②「御聞被成御聞」は三本共通、衍字 ③「ラ」  
(大・金) ④「別」(大)、測・測の誤字か。⑤「直」(大・金、底本  
も後出は「直」) ⑥「遇」(大・金) ⑦「ソ」(大・金) ⑧「シ」  
(大・金) ⑨「五」(大) ⑩「犬」(大・金)

一 芸州奴田ト云所ニ多坂善可ト云者アリ。此者若キトキ多坂善兵衛  
ト云テ、小早川隆景ニ勤仕シテ数度ノ場数アリ。隆景ノ感状ヲ餘  
多モチタルモノ也。然トモ年老テ五湖ノ遠島ヲ楽ト心得テ引籠、  
閑ニ星霜ヲ送リシトナリ。若キ兵共、其勇猛ヲ感信シテ彼草莽ニ  
尋ネ入テ物語ヲ聞者アリ。時ニ善可カ云ク、「戦ニ臨テハ別ニ替  
タル事モナシ。唯勇ヲ先トシテ徒ナルヨリ外ナシ。然トモ、明日  
戦可有ト云時ハ前夜ヨリ終夜不寐ホドニ、不懸心ハ群ヲ不可抽。  
其故ハ、具足ノ上帯、鞋ノシマリ緩マリテモ人ニ後ヌルモノナリ。  
シマリテモ駈走り自由ナラス。緩クシテモ不成。勿論、ホドケヌ  
レハ仕直ス間ニ、人ニハ五町モ後レヌルモノナリ。又具足ノ着ヤ  
ウニ依テ、不自由ナリ。不自由成時ハ、思ヤウニ不働。々々時ハ  
不慮ニ討死ヲモ可為者ナリ。此故ニ、前夜ヨリ具足ヲ着テ寐ツ  
起①ソシテ少シモ心懸リナキヤウニシテ、戦場ニ出ルヲ心懸ノ武

士トハ云リ。此旨思量シ給ヘ」ト語りシト云々。  
誠ニ有功者ノ物語ハ千金言トモ可謂。去ハ世ノ諺ニモ、持クニ追  
付貧病ナシトモ云侍リヌ。

①「ツ」(大・金)

一 小幡勘兵衛景憲、大坂冬陣ノ時ハ加賀ノ前田肥前守殿先備ヲ借テ  
被立ケルニ、加賀ノ人数、真田ノ出丸ヲ責シ時、城内ヨリ鉄炮ニ  
テ打ツクメラレケル時ハ、家ノ焼跡ニアルヘツ、イノ土ヲ楯ニシ  
テ伏テ在シニ、ヨキ楯ニテ有シトカヤ。其節烈シク鉄炮ニテ打立  
ラレテ退ク者モ多カリシニ、其名ヲハ不覚、彼是七人堀際ニ在シ  
ニ、景憲一人立上リ、小幡勘兵衛ト名乗給ヒシト也。扱又、景憲  
ノ家頼ニ村上庄次郎・杉山八蔵ト云者アリ。其場ニテ庄次郎、左  
ノ肩先ヨリ右ノ脇ノ下雁骨ノハツレヘ鉄炮ニ被打抜タリ。其時、  
八蔵肩ニ引掛テ退ケルニ、先我カ小便ヲシテ手ノ裏ニウケテ為吞  
引退ケル。十四・五間退ケレハ、少シ物蔭ノ有ケルニ下シ置、景  
憲ノ方ヘ立飯ルニ、早惣人数ヲ引揚タリケレハ、又庄次郎ヲ肩ニ  
掛引退テ、種々医療シテ、終助リタリ。養生ニモ難堪事ノミ多カ  
リケレトモ、気情強ク療治シテ本復シタリ。以後ニ 権現様ニ  
モ、其様子気情強療治セシ様子迄被及聞召、「扱々強キ男哉。定  
テ甲州者ニテアラス」ト上意ナリシト云々。  
是ヲ思テ見ルニ、景憲名乗ラレケルハ、城内唯ノ敵ニモ非ス。同  
シ甲州侍ナルニ依テ、打込ノ兵ニ非ス。互ニ名ヲ知り、被知タル  
働ハ一入振相迄モ嗜ミテ、尋常ニト思所、武ノ本意ヲラン者歎。  
故ニ被名乗タル成ヘシ。又ハ勘兵衛ト知タラハ、若ハ情有テ鉄炮  
ニテ不行事モ可有力。然トモ、前ノ義可当坎。家頼ノ村上庄次郎・  
杉山八蔵カ事。庄次郎深手負タルニ、八蔵我小便ヲシテ手ニウケ  
テ為吞タルニ、庄次郎イヤトモ不云シテ吞タルコト、景憲ノ家頼  
ナルニ依テ、常々武功ノ物語ヲ聞①ン故也。小便ハ希代ノ血ハシ  
リナリト云リ。然トモ、武ノ本意ヲ不知ハ難為吞カラシ。去ラハ、

甲州ニテ武士深手負テ胴へ血ノ落タリケルニ、葦毛馬ノ糞妙藥ナリトテ吞セケルニ、彼者云ヤウ「命ヲ惜テ馬糞マテ喰タレトモ死タリナンド、云レンハ、骸ノ上ノ恥辱ナリ。譬死スルトモ、馬糞ヲハ吞マジ」トイヘハ、其坐ニ功有武士ノ在ケルカ「武士ハ深手負テハ如何様トモシテ助力ケルヲ手柄トシ、本意トス。先我試テ吞マセン」トテ、馬糞ヲ水ニタテ、天目<sup>モウ</sup>ニパイ飲テ「成程味ハイヨシ飲給へ」ト進ケレハ、飲テ助力タリト云リ。去ハ、八蔵モ傍輩ノ深手負テ死スルトモ本意ヲ知ラスンバ難為吞カラシカ。庄次郎末期ニ及ニテモ本意ヲ不知ハ難吞ランモノ欤。武ノ本意ニ非ンハ慮外ナリ。末期ニ及テモ人慮外ヲセハ指違ヘキニ、武ノ本意ヲ知テハ又能働ナリ。又、八蔵カ傍輩ノ深手負タルヲセハシキ場ニテ引掛テ退タル斗モ、甲州ニテハ場中ノ高名ト同前ナリト云リ。

①「シ」(大・金)

一 永祿・元龜ノ比、和州峯ノ城ニ梶川弥三郎ト云人モ被籠ケルニ、最早城ノ大口口ヲ被敗テ、敵軍大勢押入ケルニ依テ、城難堪シテ柵塀ヲ乗越々々、城内ノ軍兵共落行ケルニ、弥三郎云ヤウ、「此山城ニテ、柵塀ヲ越テ落行ケハ、却テ為敵可被討ト存ルナリ。イサヤ追手ノ敵軍ノ中ヲ突敗テ可落、イサ、セ給へ」ト云テ、彼是五・六人云合セ、鎗ヲ伏折數テ待居タル所ニ、敵軍ハ城ハ落タリト思ヒ、軍ノ備ヲモ不分、茫然ト大勢追手ヨリ押込ケル所ヲ、ドットヲメイテ突テ懸ケレハ、鎗五・六本ニ突立ラレテ、寄手ノ軍勢敗軍シテ、ヒタ崩レニクツレテ引ケル程、最前柵塀ヲ越テ落行ケル城ノ軍勢トモ皆飯來テ、思ノ外ニ城ヲ持堅メタリト云ヘリ。其後ニ又、公方源義昭公、城州宇治槇島ニ陣シ給フヲ、織田信長公

ノ軍勢、宇治川ヲ渡シテヲヒ落シタリ。其時、槇島ヲ追落タル由注進有ケルニ、信長公被仰ケルハ、先陣ハ定テ、梶川弥三郎ニテ可有由御意也。御察ノコトク、梶川弥三郎・佐久間備前〔此備前宇治川被渡シ馬ハ、長一寸アリシ馬ナリト云伝タリ〕兩人ニテ有シト云々。

誠以勇猛ノ働タルヘシ。第一、勇ナクンハ落城ノ砌、此思案ハ出マシ。勇有男ト云ヘシ。何程ニ勇有テモ、地形悪キ所ニテ如此ノ働セハ、討死ヲハスルトモ功ヲハ難遂。能誥リノ所、又ハ敵ヲ少見ヲロシテ勢有地形、兎角可勝利有所ニ居テ、討死ト思定テ敵ヲ待受スンハ、敵崩テ敗軍ヲハセマジ。第二ニ、智ナリ。又ハ敵軍備ヲモ不分、城ハ落タリト意得茫然ト押込ケルヲモ見付タルヘシ。是モ又智謀ナリ。常々モ勇氣盛ナル男トミヘタリ。信長公、槇ノ先陣ハ定テ梶川ニテ可有ト宣フ事、諸人ニ勝レテ勇猛ナル上ニ、心懸油断ナキ男、無疑生付勇ナリトモ、心懸ナクンハ群ニ勝レン事ハ難成カラン者欤。此旨思量セヨ。又馬ハ小長ナリトモカンヨキ馬ヲ可好。乍去、我ニ不相ハ何ニカハセン。是モ能々思量スル所、心懸ノ内ナレハ別ニハナシ。

一 天正年中ニ誰ノ軍勢トハ不知、荻田孫市ト云者有。〔此荻田孫市ハ、元來上杉謙信ノ家頼ナリ。然ルニ謙信、養子トシテ小田原ノ北条氏康ノ末子北条助五郎殿、同三郎殿兄弟ヲ越後へ呼越給ヒケル。扱、謙信逝去ノ後、甥ノ上杉喜平次殿ト遺跡ヲ争テ、中間取合トナリケルニ、此北条丹後ハ北条方ノ勇兵ナリトイヘリ。又、其比、北条三郎殿隨一ノ者ニ、柴田越前ト云ハ剛強謀略ノ譽有モノ<sup>①</sup>アリケルカ、彼者ノ鎧ヲ毛色ヲ荻田<sup>②</sup>見覺ヘ前夜云ヤウ、「柴田越前、今日如此ノ鎧ヲ着テ出タリ。明日モ又戰場へ出ハ、我等討取ヘシ」ト云ケルカ、其詞ニ不違柴田越前ヲ討取ケルト云ヘリ。其後、年経テ流浪シテ有ケルニ 権現様ヨリ被召ケレトモ、如何思ヒケン罷不出トナリ。其後、結城秀康へ被召出ケルニ、

権現様上意有ケルハ「其方ハ浪人ヲ召抱ヘタリト云カ、何者ニテ侍ル」ト宣ヒケレハ、秀康宣ヒケルハ「萩田主馬ト申者ニテ侍ル」ト宣ケレハ、権現様「主馬ハ其方ナトカ所へ出ル者ニテナシ。覚束ナシ。扱、所領ハ如何程ニテ召抱ケル」ト被仰ケレハ、「三千石ニテ召抱ケル」ト宣ヒケレハ、「夫ハ誠ノ萩田ニテハ有間敷」ト上意ナリ。秀康「否、越後ノ謙信ニ罷在シ主馬ニテ侍ル」ト宣ヒケレハ、権現様上意ニ、「誠ノ萩田ナラハ一万石ヨリ内ニテハ不足タルヘシ。一万石ハ可遣」ト上意有ケレハ、秀康一万石遣ハサ<sup>③</sup>シケルトイヘリ。敵国ハ越後ノ上杉景勝ノ御内ニ北条丹後ト云者、此丹後ハ数度ノ誉有テ、荒者ニテ、其比近国ニテハ鬼丹後ト被言シ程ノ者ナリ。右ノ孫市、十九歳ノ時ナリ。其節、未小身者ニテ伏兵ノ内ニテ伏<sup>④</sup>テ在越後押来ニ、鬼丹後一騎軍勢ニ先立テ伏兵ノ前ヲハタノト乗通リケルニ、十七人伏テ在ケレトモ、十六人ハ不起立通シケルニ、十六人目ニ在シカ、萩田孫市ト名乗テ立間ニ鎗ニテ突、鞍ノ後輪陶形ノ内ヨリ突通シ、尻ヲ突抜タリ。丹後振返、「世悴目」ト云テ馬ヲ早メテ早々軍勢ヲモ引テ飯ケルカ、其手疵ニテ終死タリト云リ。以後ニ結城秀康ノ家老トナツテ萩田主馬ト名乗シト云々。

是ヲ思フニ、十六人伏テ先ニ在シ兵共不起立、十七人目ニテ後ニ在シカトモ、起立テ丹後ヲ突シコト、若キ兵ニハ寄<sup>⑤</sup>持ト云ヘシ。去ハ、敵ノ来ヲ待時ハ、自ラ氣シマリテ難発シ。又ハ敵急成時ハ、周章騒テ取合難シ。此ニツヲ能勘弁シ給ヘ。油断セス周章セ<sup>⑥</sup>ス所有ヘシ。去ハ関東ニテ功有武士ノ物語ヲ聞シニ、皆人伏テ敵ヲ待時、敵ノ軍勢近付寄時、皆人大形鎗ノ穂首ヲ抱テ待掛ルニ依テ、起立テモ遅レ。吾ハ人不知鎗ヲ敵ノ近付寄程、次第ニ少シツ、繰出待懸シテ、依テ起立ト等ク敵ヲ突倒シ、間物早カリシト語シトカヤ。此孫市モ其意得ヤ有ケン、功ヲ遂シ。鎗ナラストモ、心斗ニテモ繰出ス意得有ハ物早カラン物欤。周章ハ<sup>⑦</sup>スケナリ。遅キハシマリナリ。能々執行シ給ヘ。

①「ナ」(大・金) ②「ミ」(金) ③「レ」(大・金) ④「ヲ」(大・金) ⑤「特」(金) ⑥「ヌ」(金) ⑦「ヌ」(大・金)

一 権現様、参河一國御支配被成時分、鳥居金次郎・服部金次郎ト云者有。兩人殊ニ睦シ。鳥居金次郎ハ戦ノ度毎ニ鎗ヲ持テ出ル。服部金次郎ハ戦ノ度毎ニ弓ヲ持テ出、毎度群ニ勝レテ働ケル。然トモ、鳥居金次郎、毎度ニ一鎗・二鎗ヲ仕ケルニ依テ、高名ノヤウナリ。或時、服部金次郎、弓ヲ不持鎗ヲ持テ出タリ。諸人云ヤウ、「常々、貴殿弓ヲ持テ勝負セラル、人ノ、何トシテ今度ハ鎗ヲ持テ出給事、不審ナリ」ト云ケレハ、「去ハ鳥居金次郎ニ、我ハ不劣働トイヘトモ、弓ニテ勝負ヲスレハ、吾不働ヤウナリ。故ニ今度ハ鎗ヲ持テ出タル」ト云シ。鳥居金次郎モ、不得手ナル物ヲ持給ハンヨリ、「貴殿常々、得物ノ弓ヲ持給ハテ」ト云シトナリ。サテ戦場ニテ鳥居カ思フヤウ、「今度、服部カ鎗ヲ持テ出シカハ、服部ニ負マシ」ト思ヒ、一騎備ヲ乗抜テ、小塚ノ蔭ニ下敷テ敵ノ備ノ近付ヲ待所ニ、服部金次郎ハ鳥居ニ目ヲ付、静ニ歩ミ寄。鳥居金次郎ハ、敵ノ備ノ<sup>①</sup>神来ヲ小塚ノ蔭ヨリヒタトノゾキ居テ、能時分ナリト思ヒテ鎗ヲ取、足踏シテ立上ル所ニ、二・三間後ヨリ「鳥居ニハ負マシ」ト云ナカラ走抜、「服部金次郎」ト名乗テ一番ニ鎗ヲ入。鳥居金次郎モ、二番ニ鎗ヲ入テ備ヲ突崩シ、敵ヲ討取タリ。サテ、軍終テ服部金次郎云ヤウ、「吾、常々弓ニテ勝負ヲスレハ、人々鳥居ニ負ルヤウニ被存ト見ヘタリ。故ニ今日ハ鎗ニテ勝負ヲ仕タリ。我ハ弓カ好ナルニ依テ、常ニ持テ出タリシ」ト云ヒシト云々。

誠此服部金次郎、勇アリ智アリト云ヘシ。其故ハ、我モ鳥居金次郎ニ不劣働ト云トモ、其名不高事ハ此道理ナリト知テ、鎗ヲ持テ出ル。然トモ鳥居ハ数度鎗ニテ勝負ヲシタルニ依テ、能様子ヲ知ツラン。吾ハ常々弓ニテ勝負ヲセシニ依テ、不功者ナル所ヲ知テ、鳥居ニ目ヲ付、鳥居ニ敵相ノ様子ヲ見セ、鳥居足踏シテ鎗ヲ入



ト立上ル所ヲ、後ヨリ走抜テ鎗ヲ入ケルコト、智士ナリ。然トモ勇ナクンハ、此智ハ不可出。然ハ勇士ナリ。如此ノ兵ハ乱国ノ重宝ナリ。弓ヲ持テモイヨク敵ノ大軍ヲナビカスヘキ事勿論ナリ。鳥居金次郎、服部二先ヲセラレケルコト、少油断トハ云ナカラ、不苦事歟。常々油断セハ悪カルヘシ。常々数度功ヲ遂タラン者ハ、若兵ナトヲ取立テ、功ヲ遂サセヌルコト、老功ノ情タルヘシ。一生人ニ勝レント思シヨリ、功ニ不修油断セス、死ニ至テ不変ハ、上勇タラン歟。

又、是ニ似タル物語アリ。関東戦国ノ時分、其主其名字ハ不覚、実先ト云者有テ〔此実先ハ北条氏康ノ家来ナリト云々〕其家ニテ戦毎ニ先ニアラスト云コトナシ。又、其傍輩ニ実先ト毎度功ヲ争トイヘトモ、終ニ実先ヨリ先ハ不成。然トモ実先ニ繼テハ此者ナラテハ別ニ可謂者ナシ。然所ニ、此者煩テ末期ニ及ケル時、実先ヲ呼テ頼ケルハ、「吾日比貴坊ト先ヲ争ト云トモ、終ニ貴坊ヨリ先ヲセスシテ死スルコト、無念千万ナリ。然トモ、病氣ニテ今度命終事不及是非所ナリ。吾一子ヲ貴坊ニ頼申ナリ。吾死後二世倅ヲ可預御引廻」由ヲ云テ死ス。其子、実先ヲ頼テ成長シ、最早十五歳ニ成<sup>②</sup>ス。其節、敵軍起テ味方ノ城下ニ押寄タリ。彼者若年ナレハ親ノ如遺言、実先ニ從テ居タリ。然ル所ニ実先時分ヲ見計ヒ、敵ニ懸行ニ、彼者実先力後ニ付テ行。敵間五間程ニ成時、「実先爰力」ト云テ一番ニ鎗ヲ入タリ。実先モ繼テ鎗ヲ入テ敵ヲ討取タリ。親ノ一生ニハ先ヲハセラレザリシカトモ、十五歳ニナル若輩者ニ先ヲセラレタリト云ヘリ。定テ是愛憐ノ心有故ニ、先ヲセラレタルナルヘシ。油断ニハアルヘカラス。

①「押」(大・金) ②「ヌ」(大・金)

一 正保・慶安・承応ノ比、江戸御簾本ニ朝夷奈ノ何某ト云者、若者ニテ六方者ノ奴ニテ、異名ヲハ鎗無兵衛ト云シガ、辻切・喧嘩度々ニ及テ沙汰ノ有ケレハ、公儀ヨリ其親ニ預ケラレタリ。此者後ニ

『功名咄』一(上卷ノ上)

物語シケルハ、「一度危命助リタル事アリ。其故ハ、所ハ江戸一ヶ谷ノ升形ノ内ニテ、一僕ニテ通リシ者ヲ辻切ニシタリ。彼僕走去テ『辻切ヨ』ト呼フ。升形ノ中ノ方ナル辻番ノ者、『狼籍者遣間ジ』ト云テ走出タリケレハ、折節向ヨリ灯燈數多持セテ来ル程ニ、可通ヤウモナキ俣、土居ニ伝ヒ堀際ニ下テ行ニ、声々ニ『遣ナノ』ト云テ、『ソコへ爰へ』ト云追懸ケレハ、土居ノ内ナル屋敷ヨリモ灯燈ヲ出タリ。故ニ數多ノ灯燈ニテ大形昼ノ如クナリ。何方ヘモ可通ヤウモナキ故ニ、堀へ飛入水底沈テ隠居ケレハ、諸人不見付シテ、不思議ノ思ヲナシテ皆眠<sup>①</sup>ス。其夜ノ明方ニヤウ々々堀ヨリ出テ、宿所ニ皈リヌ。是程危事ハナカリシ」ト語時ニ、「扱、水底ニテハ何トシテ隠レケルソ」ト尋ケレハ、「去ハ古ヘ文祿・慶長ノ比、大鳥一平ト云シ大鬼子ノ六方者、辻切ヲシテケルニ、四方ヨリ襲来テ無詮方俣ニ、刀ノ鞘ヲ切テ口ニクワヘテ鞘ハカリ水ノ上へ出シテ、隠居テ命ヲ助リタリト聞伝タリ。我モ無詮方マ、思ヒ出シテ、脇指ノ鞘ヲ切テ口ニクワヘテ鞘バカリ水ノ上ニ出シ、息ヲ<sup>②</sup>ソギ、橋柱ニ抱付テ隠居タリ。大勢灯燈ヲフロシ、四・五返サガシケレトモ不見付シテ皆眠去ヌ」ト語リシト云々。

去ハ如此ノ六方者タニ其道ニ達シヌレハ、勝レタル智略モ出テ命ヲ助タリ。聞覚タルモ益有テ、又然ナリ。武ヲ嗜ン者ハ、如此ノ事モ聞覚ナハ不慮ノ用ニ可立事、勿論ナリ。昔モ余湖將軍惟茂、奥州ニ居住シ給<sup>③</sup>ヒ比、其近境ニ沢勝四郎諸任ト云者ト、田島ノ争論有ケル。意趣ニテ俄ニ兵ヲアツメ惟茂ノ館へ押来折節、郎等打散テ漸々二十人ハカリニテ防戦ケレトモ、敵大勢ナレハ不叶シテ皆討死シケルニ、惟茂妻子ハ落ケレトモ、我ハ遁ヘキヤウナクシテ、館ニ火ヲカケテ偽テ討死シタル真似シテ、池ノ中ナル死骸ノ中ニ隠居テケリ。敵軍ハ「最早郎從ハ皆討死シタリ。惟茂ハ定テ腹ヲ切テコソ館ニ火ヲ掛ツラン」ト思ヒ、軍勢<sup>④</sup>皈シヌ。心有者ハ惟茂ハ智謀有者ナリ。其首ヲミザランニ於テハ、覺東ナシト

云。然トモ、軍勢勝軍シテ本望ヲ遂タリト喜テ、道ニテ酒宴ヲシケルニ、惟茂ノ郎從ハ方々ニテ此戰ヲ聞、駢集リケルカ、早軍ハ散テ<sup>⑤</sup>燒ニ來テ涙ヲ流ケル。郎從五・六十人聚テ後、池ノ中ヨリ、「惟茂未存生ニテ、爰ニ在」ト云テ出給ヒケレハ、郎從喜事無限。其時、惟茂宣フヤウ、「去ハ時刻ヲ移スヘカラス」。追々聚ル郎從百余人ヲ以テ追カケ、敵茫然ト酒宴シテ在ケル所ヲ、一人モ不殘討取タリト、古キ書伝ニミヘタリ。然トモ、是死骸ノ中ニ隱居タルト有ハ可危事ナリ。敵一々首ヲ取ントナラハ危カルヘシ。若亦此ノ如ノ秘術モ有ケルモノ歟。又、天正年中、尾州長久手合戰ノ時、味方敗軍シテ池田勝入、同紀伊守殿ハ討死シ給ヒヌ。同三左衛門尉輝政・家頼伊木清兵衛、兩人ノ長久手ノ橋下ニ隱居テ命ヲ繼、家ヲ興給フト云リ。誠ニ万事ニ心ヲ付テ見給ハ、益有ヘシ。徒ラニ物ヲ見分スル事ナカレ。

- ①「ヌ」(金) ②「ツ」(大・金) ③(金、「ヒ」のあと、右に小さく「シ」あり) ④(金、「勢」のあと、右に小さく「ヲ」あり) ⑤(金、「燒」のあと、右に小さく「跡」あり)

一 甲斐信玄ノ御内、山懸三郎兵衛ハ、飯留兵部ト云シ大身ナル家老ノ弟ニテ、初ハ飯留源四郎ト云シ。永祿四年、信州川中島合戰以後、信玄ト太郎義信ト此合戰ノ義ニ付テ親子不知ナリ。又、飯留兵部ハ數度ノ軍功、又ハ信虎ノ時ヨリノ家老皆死果テ、物毎恣ナルニ依テ、侈ヲ生シ、弥我僭ニ權威ヲ可執事ヲ計テ、義信ヲ進メ、逆心ノ企アリ。或時、信玄出坐ノ時、飯留源四郎近習奉公ニテ、御刀ヲ持參ス。時ニ或者、飯留兵部、太郎義信ヘ陰謀ヲ進メ奉リシ由訴タリ。信玄思慮深シテ、可被偽由被仰テ疑敷思召<sup>①</sup>休ナリ。其時源四郎カ云ク、彼カ申上ル所、一々不成偽由言上ス。信玄、「去ハ証抛ヤ有」ト宣フ時、源四郎、懷ヨリ數通ノ書状ヲ取出獻上ス。扱云ヤウ、「如此ノ惡逆、前代未聞ナリ。疾ニモ申上度存候ヒツレトモ、惡逆トハ乍申、兄ノ儀ヲ訴ヘ申段迷惑至極セリ。

迎モ訴人可有之間、其時分委細ニ言上スヘキト存シ罷在シ」由ヲ申上。故則、飯留兵部ハ御成敗ナリ。義信モ、十年斗座敷籠ニ御入有テ、終ニハ御切腹ナリト云リ。扱、右ノ源四郎ニハ、兵部跡式不殘給フテ、武田家ノ家老山縣ニ被成テ、山縣三郎兵衛ト云テ、駿州江尻ニ在城シテ、相州小田原北条氏康、參州 徳川家康公ノ押トシテ、武勇智謀律儀ニシテ、信玄ノ家老ノ中ニテモ一・二ヲ争ヒシ者ナリト云々。

是ヲ思テミルニ、喻親兄タリト云トモ、主ニ逆心有時ハ、同心ハ不可成。然トモ、又訴人ニ出ル事モ難成思フ所、尤至極セリ。山縣カ云分道理ナリ。然トモ、其兄ノ殺給フテ其跡式ヲ給フ時ハ、断ヲ云テ不請、其家ヲ出テ他家ニ行テ勤仕セハ、一段潔カラシク何ソ故有テ請<sup>②</sup>ンハ不知。此段殘多シ。山縣ハ定テ心中ニ毛頭モ穢ナク、清潔ニシテ請ツランナレトモ、今世ニ至テハ不潔。去ハ、主親ヲ討惡逆有テ、昔周武王主ヲ討シ。誰ニハ親ヲ殺シ、我モ其道理有故ニ、覺有シナト云ハ、誠ニ口ニ云シ理ハ左モ可有。心根ハ覺束ナシ。我ハ聖人ニ非スンハ是ヲ不可免。日夜朝暮ノ行跡ニ毛頭モ欲心ナカラン如ク嗜ン人ナラハ、若無拋義モ有ハ、左モアランカト可思坎。同クハ其道理ヲ不云シテ、立カ如クニセマホシキ物坎。

又、相州小田原落城ノ時分松田尾張守隱謀之企有シニ、其二男左馬介諫言シ、留ト云トモ不止故ニ、左馬介氏政ノ前ニ出、尾張カ命ヲ可給ニ於テハ、一大事ヲ奉告由ヲ申。氏政兎モ角モ、可任其意由ヲ宣フ。其時、尾張カ隱謀一々言上ス。故ニ其備有テ、尾張守ヲハ左馬介ニ預ケ給フトナリ。其城危ク、諸軍勢甚困ムニ依テ、氏直先自ラ尾張ヲ誅シ降參有故、諸軍勢ノ命ヲ助ケテ、氏政ハ御傷害アリ。氏直ハ高野山ヘ赴給フ。松田左馬介モ供ニ屬ス。誠ニ是等ハ我父ナリトモ、叛逆有時ハ不同意、重恩ノ主ニ奉告事、左モ可有。殊ニ先達テ、父ノ命ヲ給フトナラハ、一大事ヲ可奉告由ヲ云シ事、尤至極セリ。乍去、同シクハ父叛逆ノ企有ハツヨク諫

テ、不叶時ハ自殺セン物歟。父惡逆トハ云ナカラ、父ヲ訴ンモ流石子トシテハ難訴事也。同意センハ惡逆ナリ。兎角死ンニ不然。死スルハ遁去ノ道也。左馬介父力惡逆ニ同意セス、父力命ヲ給フトナラハ、一大事ヲ可奉告由ヲ云テ、重恩ノ主ニ奉告事、第二ノ仕様ト可云。乍去、氏直又尾張ヲ誅シ給フ時ハ、自殺スヘキコトナリ。責テハ、尾張守ヲ殺シ給フヲ可恨道理ナシトハイヘトモ、可奉仕道モナシト云テ、氏直ニ不随ハ、其道ヲ守ニ成ナン。随シハ初二事カワリテ埒ナシト可云物歟。タトヘハ其父惡逆ニテ主殺給フ時ハ、可奉恨ノ道理ナシトハ云ナカラ、可奉仕道理モナシ。左有ハ、左馬介ハ其上父ヲ訴タリ。其故ニ被誅タリ。然時ハ、自殺シテ無私本意ヲ顯シモノ歟。如此セハ、第一ノ仕ヤウト可成。責テ不随ハソノ道有驗トモ可成歟。氏直ニ随フニ依テ、其初叛逆ヲ訴ヘシモ、深キ義理ニ徹シテ成タルヤウニハ覺不侍。去ハ聖智ニハ、主ハ主、親ハ親、兄ハ兄、弟ハ弟、子ハ子、妻ハ妻、朋友ハ朋友、其差別輕重、分明ナリト見ヘタリ。如我等凡下ハ、分チテモ難分。此段能々思量セスンハ功ヲハ難遂。

①「体」(大・金) ②「シ」(大・金)

一 甲州武田信玄ノ御内ニ在シ曾根内匠ハ、信玄旗本ノ足輕大将ニテ、武藤喜兵衛・三枝勘ヶ由左衛門ト此三人、持筒ヲ預リシ者トモナリ。甲州没落以後、曾根内匠流浪シテ城州伏見ニテ、蒲生氏郷ヘ知行三千石ニテ被召出シニ、會津若松ヘ参罷在ヘシ。若松ニテ目見ヲ可請由ニテ、奥州ヘ越タリ。氏郷アトヨリ、内匠ハ名有者ナリ。三千石ニテハ可為不足トテ、追テ知行七千石ニ被成タリ。其後、氏郷伏見ニテ追付病死被成テ、奥州ヘ下向ナシ。曾根内匠若松ニテ聞之、愁傷ス。扱、云ケルハ「甲州侍共、何レモ皆立身ニテ在付タリ。我モ三千石ハ不足ナリ」ト云。「氏郷ハ名将ナレハ知行ノ員数ニ不構出シ所ニ、追テ四千石ノ加増被成。七千石被下テ面目身ニ余ル所ナリ。然ニ氏郷卒去、絶言語所ナリ。氏郷御芳

恩可報ヤウモナシ。最早浮世ニ望ナシ」ト①去テ、追腹切テ死セシト云々。古語ニ云、「香飼ノ下ニ懸魚有。芳恩ノ下ニ死夫有」ト云事、実ナル哉。

氏郷恩沢有シニ依テ、内匠又其芳恩ヲ感信シテ追腹シタリ。去ハ此内匠事ハ、甲州没落ノ時分、何ノ沙汰モナシ。然レトモ、此所ヲ以テ見ル時ハ、定テ無拋様子有テ勝頼ノ供ヲモセス、討死ヲモセサリシ者成ヘシ。如此義ヲ思フテ追腹セシ者、譜代ノ主ノ滅却スル時ハ討死セスシテ可通ヤウナシ。然トモ、其主ニ依テ、義士モ不義ニ成物トミヘタリ。信玄ノ時ハ義有武士トミヘシモ、不義ノ族多シ。喩其君々タラスト云トモ、臣以テ臣タラスンハアルヘカラス。云ヘハ其旨ヲ守給ヘ。曾根内匠、義ニ依テ追腹セシ故、甲州没落ノ節ハ定テ何トソ無拋事ニテ、勝頼ノ供シテ討死セサルモノト思侍ル。

①「云」(大・金)

一 関ヶ原合戦、慶長五年九月十四日・十五日、兩日ニテ有シトナリ。其最初、上杉景勝、佐竹義宣上洛セサル故 権現様ヲ惣大将トシテ池田三左衛門尉殿・福島左衛門太夫殿・黒田甲斐守殿・加藤肥後守殿・加藤左馬介殿・細川越中守殿・浅野左京大夫殿、其外彼是以上十一頭討手トシテ御下向有。是ハ内々石田治部少輔、上杉景勝、佐竹義宣ト云合セ 権現様其外大名衆ヲ関東ヘ下シ、跡ニテ謀叛シテ天下ノ權ヲ可取トノ謀略ニテ有シトカヤ。爰ニ石田治部少輔家頼、須藤久左衛門・沢村何某ト云者有。治部少輔領地武藏ノ内ニ万石有シニ 権現様「御馬草以下御馳走ノ為ニ」ト云テ、右ノ須藤、沢村兩人ヲ 権現様御下向ニ指添テ下シケル。其跡ニ於テ、石田治部少輔、上方ニテ謀叛ノ由告来ケレハ 権現様諸大名衆ヲ呼集メ、上方ニテ石田治部少輔、其外彼是謀叛ノ由告来所ナリ。是ハ定テ我等ヲ可討タメニ秀頼公ヲ取立テ、謀叛タルヘキ間、我身ノ兎毛角モ安否ヲ定ムヘキ間、何レモ太閤

ノ御恩受シ衆中ナレハ、誰ニテモ上方へ志有ハ、御上リアラレ侍レ。此時節ニ可恨道理少モナシトノ御意ナリ。其時福島左衛門太夫殿被申ケルハ、「何シニ治部少如ノ未タ口脇ノ黄ナル者ノ麾下ニ付ヘキ。如此御一所ニ罷下テコソ幸ナレ。御一所ニ兎モ角モ可成ナリ。勿論、上方ニ有之人質ヲハ可捨由被」申ケル〔一説ニハ細川越中守殿、一番二人質ヲ可捨由被申ケルニ依テ、以後二肥後ノ国ヲ給ハリシハ、此賞ナリトモ云伝タリ〕其時、何レモ「扱々太夫殿ニ先ヲ被越申タリ。何レモ左様ニ存ル所ナリ。一味同心可仕由連署ノ誓紙ヲ仕テ可進」由被申ケレハ 権現様御意ニハ、「何カ歴々左様ニ被仰ル、上ハ誓紙ニハ及不<sup>①</sup>待」ト御意ニテ、左アラハ評定シテ合戦スヘシ。先佐竹ヤ景勝ヲ可討坎、又ハ上方へ上テ一戦スヘキカト評定被成ケルニ、先上方ノアシノナル内ニ、奥州佐竹ニハ押ヘヲ置、上方へ攻上リ、治部少輔以下ト有無ノ一戦可然トノ評定ニ依テ、結城秀康関東ニハ御残有テ、御上リ有シトナリ。其評定ノ有ケル所ニ、治部少家来須藤久左衛門・沢村ノ何某上下ヲ着、白洲ニ出云ヤウヲ承リ候ヘハ、「上方ニテ治部少輔、御敵ニ成タル由ナリ。我等共御前御馳走ノ為ニトテ罷下リ、是ニ罷有候ナリ。然トモ、治部少輔御敵ニ罷成候上ハ、我々ヲ捨殺サレタリト存ル所ナリ。此上ハ御成敗ナリトモ、兎モ角モ御意次第ナリ」ト申上ル。其時 権現様御意ニハ、「扱々、其方共ハ被出間敷所ヲ能出タリ。昔ノ樊噲ニモ劣ル間敷男トモナリ。扱々、能出タリ。何レモ何トカ思召。各々今爰ニテ殺タリトモ可負軍ニ可勝ニモ不侍。亦活タリトモ、可勝軍ニ可負ニモアラス。疾々上方へ被上侍レ。イテノ各へ土産ヲ參ラセシ。治部少輔へ被申候へ。追付、東山・東海両道ヨリ攻上リ候ナリ。合戦ノ勝負ハ運ノ勝劣タル<sup>②</sup>ヘキ被申ヘシ」トナリ。「実ニモノノ関東ハ我領地ニテ最早敵地ナレハ不自由タルヘシ。伝馬ヲ可申付ニテ侍ル。伝馬ニテ被上候へ」トテ、本多佐渡守ニ被仰付、兩人伝馬ニテ上リケルト云ヘリ。扱、須藤・沢村ノ兩人、治部少輔前ニ出テ右ノ

旨一々言上シ「扱我々義ハ、一度命ヲ指上御用ニ立タリ。今度希有ノ命助リテ罷上リシハ、偏ニ 内府ノ御影ナリ。故ニ御合戦ニハ出マジク」ト云ヘハ、不苦間可出由治部少輔達テ被申ケレトモ 「内府ニ命ヲ奉被助タル御恩ヲ可報ヤウナシ。左有ハ、初合戦ヲハ御免被成侍レ出間敷」ト云テ不出。二度目ノ合戦、九月十五日、小関ニテ須藤ハ討死仕タリト云々。

此須藤九左衛門、関東ニテ逃走ナハ結<sup>③</sup>句可被討ニ、誠ニ身ヲ捨テコソ泛瀬モ有ト云ヘル古歌ニ叶ヒテ侍ル。沢村ノ何某カ事ハ某ヲサヘ審ニ不聞伝。不及是非所ナリ。須藤久左衛門、有智有忠有義有勇。 権現様御前ニ不出、ナマジヒニ逃走ナハ、却テ可被討ニ、其理ヲ知テ出タルハ智ナリ。上方へ上テ討死シタルハ忠ナリ。初合戦ニハ 権現様 奉被助シ其御恩ヲ思テ不出所ハ義ナリ。初合戦ニ不出ト云ヘトモ、臆シテ不出ニハアラス。其証扱ニハ九月十五日、小関ニテ討死シタリ。最モ如中絡共ニ勇ナクンハ不可成。是コソ首尾ヨク一生ヲ仕舞タル成ヘシ。故ニ、其子孫ニ至ル迄、其名高ク面目有ニ似タリ。沢村事ハ様子ツマビラカニ不伝聞ニ依テ、審ニ不書。其段残多シ。

①三本とも同じだが「侍」とあるべきか ②「ヘキト」(金) ③「句」(大・金)

一 大永・享禄年中ニ、阿波国ノ住人、三好左京大夫、長慶ノ父三好長基ト云シ人ハ、代々細川家ノ幕下ニ属ス。ソノ初、細川澄元ト細川高国ト一族ナカラ、権ヲ争テ互ニ合戦シ、勝負ヲ争ヒケル内ニ、澄元死テ高国自ラ本意ヲ達シ、源ノ義晴將軍ノ管領職トナリ、三好長基ハ澄元ノ被官ナレハ、阿波ノ国ヨリ和泉堺へ押渡、毎度都へ攻上リケレハ、義晴將軍モ都ヲ去、江州朽木へ引退、都ノ乱ヲ避給フト云ヘリ。享禄四年ニハ、細川澄元ノ息晴元トテ十三才ニ成ケル<sup>①</sup>ソ大将トシテ、摂州尼ヶ崎・天王寺辺ニテ細川高国ト合戦シ、高国ヲ討テ、長基・晴元ヲ以テ義晴將軍ノ管領職トス。

然故ニ、長基其輔佐トシテ畿内ノ兵權ヲ執事五年ナリ。其以後、晴元漸長成シテ長基ノ威ノ強キヲ嫌ヒ、晴元ノ前不快シテ、長基ハ先撰州ヘ下リテ罷在ヘキ由ニテ、山崎ヨリ川舟ニテ下ルニ、懷ヨリ鼻紙ヲ取出シテ、クワンセヨリト云物ヲヒ<sup>②</sup>クモノ仕給フ。或人「是ハ何ノ用ソヤ」ト問ニ、「慰ナリ」ト答。扱、四・五尺斗出来テクルくト巻テ入給ヒシ。扱、泉州ノ堺へ着ス。堺ノ面々為見舞參集ス。日比御数寄ナレハ、為御慰ト云テ連歌興行有シニ、其最中ニ京都ヨリ飛脚到来ス。状箱ヲ明、書状ヲ披見シ傍ニ置、連歌ヲ仕給フニ、連中ノ何某「京都ニハ何事モ無御坐カ」ト問ニ、「何事モ無之」由ヲ答給フ。連歌ニ「薄ニ交ル芦ノ一村」ト云句出タリ。此句、難句ニテ何レモ案煩ヒシニ、長基モ同ヤウニ案給ヒシニ、亦連中ノ何某「京都ヨリハ何事ヲカ申来リ侍ル」ト問ケレハ、長基ノ曰、「我ニ腹ヲ可切由申来侍ル」ト宣フ。人々驚ケルコト不斜。然トモ、長基ハ一円ニ不構、「薄ニ交ル。芦ノ一村」ト云付句ヲヒ<sup>③</sup>ク物案シ給フニ、人々「是ハ如何ニ仕給フ」ト云ヘハ、長基、「此句ヲ不付シテ死センハ無念ナリ」ト云テ、ヒタ物案シ給ヒシカ、良在テ、「古ル沼ノ浅キ方ヨリ野<sup>ト</sup>成テ」ト云句ヲ付給テ、人々ニ暇乞シテ、最前下リ舟ニテセラレケルクワンセヨリヲ懷ヨリ取出、脇指ヲ卷テ腹搔切テ失給ヒシトナリ。此時こそ以前ノクワンゼヨリヲセラレケルハ、此用ナリ。扱ハ京都ヲ出給ヒシ時ヨリ、晴元ノ心根ヲ察給ヒ、切腹ノ覚悟有シトハ思合ケルト云々。

誠ニ、此長基ハ、「国ニ無道至<sup>レ</sup>死テ不変強哉矯」ト論語ニ侍ル。此語ニ能叶フ物ナリ。前々如何程忠貞成者モ、我死ニ趣ク時ハ悪心ヲ発ス。其時節ハ殊更乱世ニテ上軽ク。昨日ノ味方ハ今日ノ敵ト成時節成ニ、主ヲ重ンシ、年来主ヲ取立勤勞シ、其功ニ依テ晴元長成シ給フ上ニテ、其功空シテ却テ如此ク死ヲ給フ時ハ、能々金剛ノ大道心ナクンハ、大形ハ寇敵ノ思ヒヲ成テ敵スヘキ物也。自然ニ敵セヌトモ大形ハ背キ走ルヘキモノナリ。然ニ晴元下ノ志

ヲモ忘レ給ヒ、如此死ヲ給フニ、少ノ怨モナク主命ヲ重ンシ、日比数奇給ヒケル連歌ヲ緩々トシテ殊ニ難句ナリシヲ安々ト能句ヲ付給フテ終リ給事、微妙ト可云。如此儀ハ学ヒテモ難習得羨シキ心ナリ。可恨ヲモ不恨、可悲ヲモ不悲、コレこそ金剛大道心ト可謂ナリ。

①「ヲ」(大・金) ②「タ」(大・金) ③「タ」(大・金)